秋　月　遺　跡

向陽高校危険校舎改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

１９９４年3月

財団法人　和歌山県文化財センター

序

本遺跡が営まれた紀ノ川左岸の自然堤防周辺は、弥生時代の遺跡として著名な太田黒田遺跡や鳴神遺跡などがみられ、東には特別史跡岩橋千塚古墳群があり、古代名草郡の中心地と考えられているところであります。

このような歴史的環境にあって本遺跡は、昭和45年12月県道の建設工事中に発見されました。その後の調査で県立向陽高等学校校庭を中心として広がりをみせていることが明らかになり、昭和60年度には、前方後円墳や方墳が発見され一躍重要な遺跡として知られるところとなりました。

この度、当センターは、向陽高等学校危険校舎改築に伴い、本遺跡の発掘調査を平成４年から２箇年にわたり実施して参りました。

本書は、この２年間の発掘調査の成果をとりまとめ報告書として刊行するものであります。当地方の歴史をしるうえで一つの資料となれば幸いかと存じます。

最後になりましたが、調査にあたり御指導、御支援を賜った先生方や向陽高等学校の皆様方にたいし、改めて厚く御礼申し上げます。

平成６年３月

財団法人和歌山県文化財センター

理　事　長　仮　谷　志　良

例　　言

1　本書は、和歌山市秋月に所在する秋月遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。調査地は、秋月127（向陽高校校庭内）に位置する。

2　調査は県立向陽高等学校危険校舎改築事業に伴うもので、和歌山県の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに（財）和歌山県文化財センターが実施した。

3　現地調査は平成4年度と同5年度の二次に分けて実施した。第1次調査は1993年1月27日から3月29日で、調査面積は約390㎡である。第2次調査は1993年8月2日から9月2日で、調査面積は約60㎡である。その後引き続いて、報告書作成に伴う整理業務を行ない、1994年3月31日をもって全てを完了した。

4　現地調査ならびに本書の作成は、（財）和歌山県文化財センター主査　土井孝之が担当した。

5　調査にあたっては、和歌山市教育委員会・県立向陽高等学校事務局ならびに地元の方々に多大なるご協力をいただいた。記して感謝する次第である。

6　調査・整理作業で作成した図面・写真および野帳・台帳等の記録類は（財）和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。

7　本書に掲載した遺物は膨大な量の中から任意に抽出したもので、各遺構の遺物を網羅するものではない。

凡　　例

1　調査地区の地区割は、第1次調査区の南東隅に任意の基準点（0．0）を設定し、磁北に対しN－3°20′－Wに振る基準線による割り付けを行なった。また、今後の調査にも対応するため、基準線を東側に平行移動させ、今回の調査地と体育館の間のアスファルト舗装通路に仮設点4点（第7・17図参照）をクロスネイル釘により「┤」形に設置した。

2　本書に示した北方位は磁北で、標高は東京湾標準潮位（T．P．＋）の数値である。標高は、市立日進中学校校庭内（和歌山市秋月365－3）に設置されている和歌山市水準点（和歌山市都市計画部）59－02（標高4.127m）を利用して算出したものである。

3　本書に示した土層名・土質の色調は調査担当者が任意の判断で呼称したものである。

4　調査・本書に使用した遺構の略号は、SE－井戸、SK－土坑・土壙墓、SD－溝、SX－甕棺墓、P－柱穴である。遺構番号は、その種類に係らず年度毎に1番からの通し番号とし、本文中において2次調査の遺構番号には「2次」を冠している。本書に使用した遺構番号は、現地調査時のものをそのまま使用した。

5　調査・整理作業で使用した調査地のコード番号は、各々92－01・331（1992年度－和歌山市・秋月遺跡）、93－01・331（1993年度－和歌山市・秋月遺跡）である。

6　本書の遺構・土層実測図は、特に縮尺を統一していない。遺物実測図は、特別なものを除いて1／4の縮尺である。

7　本書で使用した遺物番号は、本文・遺物実測図・写真図版すべてに共通する。遺物の内300番台は、写真図版のみに掲載したものである。写真図版に収録した遺物は、特に縮尺を統一していない。

8　挿図に示した「遺物取り上げ対応層位」は、現地調査での遺物取り上げに際して付した層位で第…層で表している。本文中における第…層の表現は、土層図の1．2．3……を示したものである。

目　　次

Ⅰ　調査の経緯 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 2
　1　地理的環境 …… 2
　2　歴史的環境 …… 2
Ⅲ　調査の成果 …… 4
　1　調査の方法 …… 4
　2　基本層序 …… 5
　3　検出遺構と出土遺物 …… 5
　(1)　第三遺構面（下面） …… 5
　(2)　第二遺構面（中面） …… 12
　(3)　第一遺構面（上面） …… 21
Ⅳ　ま　と　め …… 22

図　版　目　次

図版一　1　遺跡遠景
　　2　調査前の状況
図版二　1　第三遺構面全景
　　2　甕棺墓ＳＸ５
　　3　甕棺墓ＳＸ５
　　4　土坑ＳＫ100
　　5　土坑ＳＫ100土層
図版三　1　方墳１
　　2　方墳１周溝ＳＤ106内土坑
図版四　1　方墳２
　　2　土坑ＳＫ115
　　3　土壙墓ＳＫ142
図版五　1　溝ＳＤ62西端遺物出土状況
　　2　第二遺構面東側半分の遺構検出状況
図版六　1　井戸ＳＥ７
　　2　井戸ＳＥ７井側内細部
　　3　井戸ＳＥ７井側内細部
　　4　井戸ＳＥ７曲物製釣瓶出土状況
図版七　1　井戸ＳＥ116石組み
　　2　井戸ＳＥ116竹出土状況
　　3　井戸ＳＥ128
図版八　1　土坑ＳＫ６
　　2　土坑ＳＫ６上層
　　3　土坑ＳＫ６遺物出土状況
　　4　土坑ＳＫ６石鍋出土状況
図版九　1　２次第三遺構面全景
　　2　２次井戸ＳＥ36
図版十　1　２次第二遺構面全景
　　2　２次溝ＳＤ３遺物出土状況
　　3　２次溝ＳＤ３土層
　　4　２次溝ＳＤ７土層
図版十一　出土遺物
図版十二　出土遺物
図版十三　出土遺物
図版十四　出土遺物
図版十五　出土遺物

挿　図　目　次

第１図　秋月遺跡とその周辺 …… 3
第２図　調査区位置図 …… 4
第３図　調査区基本層序図 …… 5
第４図　２次井戸ＳＥ36実測図 …… 6
第５図　土坑ＳＫ100・柱穴Ｐ118実測図 …… 6
第６図　第三遺構面（下面）調査遺構全体図 …… 7・8
第７図　調査遺構位置関係図 …… 7・8
第８図　甕棺墓ＳＸ５実測図 …… 9
第９図　方墳１実測図 …… 10
第10図　方墳１周溝ＳＤ106内土坑実測図 …… 10
第11図　方墳２実測図 …… 11
第12図　土壙墓ＳＫ142実測図 …… 12
第13図　土坑ＳＫ171・２次土坑ＳＫ５実測図 …… 12
第14図　溝ＳＤ62実測図 …… 13
第15図　２次土坑ＳＫ41・ＳＫ42実測図 …… 14
第16図　第二遺構面（中面）調査遺構全体図 …… 15・16
第17図　調査遺構位置関係図 …… 15・16
第18図　溝ＳＤ９・２次溝ＳＤ３・ＳＤ７土層図 …… 17
第19図　２次土坑ＳＫ25実測図 …… 17
第20図　井戸ＳＥ７実測図 …… 18
第21図　井戸ＳＥ128実測図 …… 19
第22図　土坑ＳＫ６実測図 …… 20
第23図　第一遺構面（上面）調査遺構全体図 …… 21
第24図　２次溝ＳＤ３出土遺物実測図 …… 22
第25図　出土遺物実測図１ …… 23
第26図　出土遺物実測図２ …… 24
第27図　出土遺物実測図３ …… 25
第28図　出土遺物実測図４ …… 26
第29図　出土遺物実測図５ …… 27
第30図　出土遺物実測図６ …… 28
第31図　出土遺物実測図７ …… 29
第32図　出土遺物実測図８ …… 30
第33図　出土遺物実測図９ …… 31
第34図　出土遺物実測図10 …… 32

Ⅰ　調査の経緯

秋月遺跡の現状は、日前宮神社境内・県立向陽高校・市立日進中学校・市立日前幼稚園敷地ほかとなっている。今回の調査地の存在する県立向陽高校の敷地は、1904年に県立海草農林学校、1915年に県立海草中学校、1948年に現在の県立向陽高校となっている。例外なく、この周辺部も急速に宅地化が進んでいる地域である。

秋月遺跡では、下表に示した過去数次の調査において様々な成果を得ている。既往の調査において最も注目されるのが、1985年度に行われた県立向陽高校の特別教室建築に伴う調査（県Ⅱ１）での、県内最古に位置付けられる前方後円墳の発見である。前方後円墳と共に相前後する時期の方墳も発見されており、当該地周辺が古墳時代に墓域であったことが明らかにされている。また、奈良時代から室町時代にかけても集落に伴う数多くの遺構・遺物が発見されている。このような重要性から、今回の調査も改築工事に先立って遺跡の取扱いについて事前に協議が成されたところである。

今回の調査は、県立向陽高校の老朽化した危険校舎の改築に伴うものである。調査位置は、第１次調査（県Ⅴ）が1985年度調査地の北側約15ｍと近接した位置と、第２次調査（県Ⅵ）が1985年度調査地と第１次調査地の間をつなぐ渡り廊下部分である。当然、既往の調査と関連する遺構の存在が充分に予測されていた地点である。

秋月遺跡における既往の調査一覧　〈県関係の調査〉

	調査年度	調査の原因・種類	面積	調査主体	文献	発行	文献発行年月
Ⅰ	1970	県道和歌山港鳴神線建設	約240㎡	和文研	「秋月遺跡」『和歌山県史　考古資料』	和歌山県	1983. 2
Ⅱ１	1985	県立向陽高校特別教室建築	約1,000㎡	〃	『秋月遺跡発掘調査現地説明会資料』	和文研	1985. 9
					『　〃　』	〃	1986. 2
					「和歌山県秋月遺跡」『日本考古学年報38』	日本考古学協会	1987. 4
Ⅱ２	〃	〃　合併浄化槽建設	約190㎡	〃			
Ⅱ３	〃	〃　排水施設埋設立会	約400㎡	〃			
Ⅲ	1986	〃　硬式テニスコートポール基礎	グリッド６ヶ所	県教委			
		〃　軟式テニスコートポール基礎	グリッド６ヶ所	〃			
Ⅳ１	1987	〃　ラグビーゴールポール基礎	グリッド２ヶ所	〃			
Ⅳ２	〃	〃　グランド整備・排水施設	約530㎡	〃			
Ⅳ３	〃	〃　グランド北西隅砂場	約120㎡	〃			
Ⅳ４	〃	〃　バレーコートポール基礎他	グリッド５ヶ所	〃			
Ⅳ５	〃	〃　北西隅テニスコートポール基礎	グリッド８ヶ所	〃			
Ⅳ６	〃	〃　グランド内グリッド	グリッド９ヶ所	〃			
Ⅴ	1992	〃　危険校舎改築１次	約390㎡	和文セ	『本報告書にて記述』	和文セ	1994. 3
Ⅵ	1993	〃　〃　２次	約60㎡	〃	『　〃　』	〃	〃

〈市関係の調査〉

Ⅰ	1985	市立日進中学校自転車置場建設	約72㎡	市教委			
Ⅱ	1986	〃　クラブ部室建設	約60㎡	〃			
Ⅲ	1987	市立日前幼稚園　建設	約　㎡	〃			
Ⅳ	〃	市立日進中学校体育倉庫建築	約70㎡	〃	『秋月遺跡現地説明会資料』	市教委	1987. 10
Ⅴ	1988	〃　ト足箱建設	グリッド２ヶ所	〃			

和文研－㈶和歌山県文化財研究会、県教委－和歌山県教育委員会、和文セ－㈶和歌山県文化財センター、市教委－和歌山市教育委員会

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境（第１図、図版一）

秋月遺跡（331）は、和歌山市市街地の東部紀ノ川の自然堤防上に立地した弥生時代前期から中世にかけて営まれた複合遺跡である。今回調査の対象となった秋月遺跡は、ＪＲ和歌山駅の南東約１㎞に鎮座する日前宮を中心として拡がり、和歌山県下では最も拓けた和歌山平野の紀ノ川左岸に位置している。

紀ノ川左岸の和歌山平野は、地形分類から見ると沖積Ⅱ面と沖積Ⅲ面に区分されている。当地域は、紀ノ川による土砂の堆積作用が最も早く進んで陸地化していったものと考えられており、古くから安定した立地にあった所である。紀ノ川の本流によって形成されたと考えられる地理的分野からすれば、秋月遺跡は沖積Ⅱ面の上位面に存在することになる。この沖積Ⅱ面の上位面とされる地形には、県下では最大規模を誇る弥生時代の太田黒田遺跡（327）を初め、津秦遺跡（332）・鳴神Ⅴ遺跡（318）が所在し、上位面から北側や南側の下位面とされる地形にかけても鳴神Ⅴ遺跡（318）・鳴神Ⅱ～Ⅳ遺跡（314～316）・音浦遺跡（319）などの弥生時代から室町時代にかけての諸遺跡が密に所在している。このように、当地域は諸遺跡（諸集落）を育む肥沃な地理的環境にあったことは想像に硬くない。

参考文献　額田雅裕「太田城付近の地形環境」『和歌山市立博物館研究紀要２』1987年

2　歴史的環境（第１図、図版一）

地理的環境でみたように、秋月遺跡の所在する自然堤防上および周辺には数多くの遺跡が分布し、県下での原始古代から中世に至る中枢部の様相を呈している。周辺部の遺跡について、簡単に触れておくことにしたい。

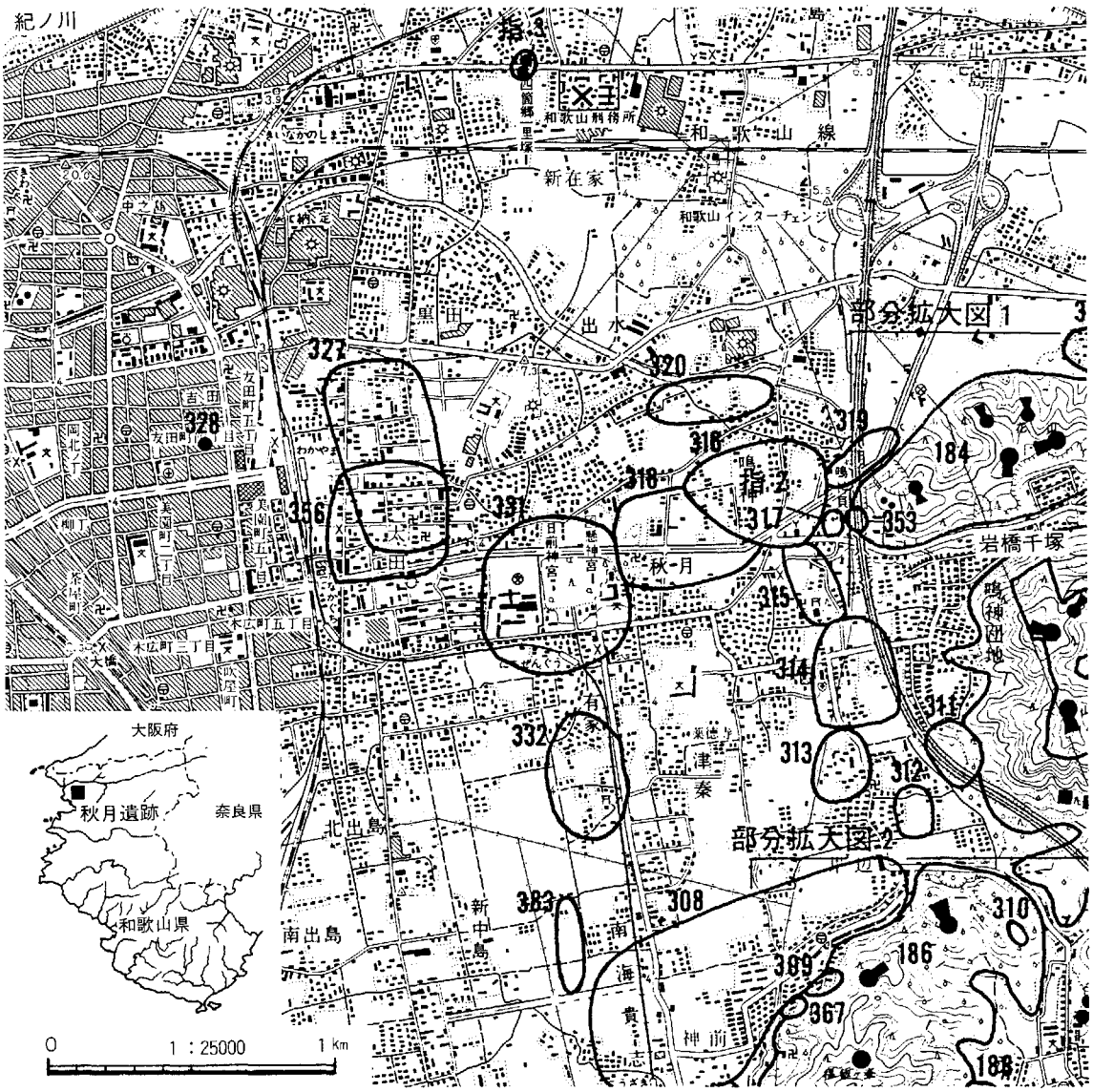
先土器時代から縄文時代の遺跡は、紀ノ川左岸の平野部では見つかっていない。先土器時代の遺跡は、やや山間に入った地域（山東大池遺跡）や丘陵台地（鳴滝遺跡）などの少し平野から離れた場所に存在している。縄文時代の遺跡は、和歌山市東部の丘陵から緩やかに延びる斜面（鳴神貝塚・禰宜貝塚・吉札貝塚）や裾部（岡崎縄文遺跡）において若干存在している。鳴神貝塚（317）は、西日本で初めて発見された貝塚として早くから知られ、国史跡となっている。

弥生時代では地形の陸地化を端的に立証するかのように、太田黒田遺跡や秋月遺跡では弥生時代前期中頃以後でないと遺構や遺物が認められない。当地域において弥生時代の集落の拡がりを把握できるのは、開発の多い地域であるにも拘らず、県下で最大規模の拠点集落として位置付けられる太田黒田遺跡だけである。鳴神Ⅳ遺跡や神前遺跡でも若干の遺物が認められるが、面的な

拡がりを捉えることはできない。

古墳時代には和歌山市東部の丘陵上に、全国的にも著名な古墳群である岩橋千塚古墳群（花山古墳群184・井辺前山古墳群186など）が形成されている。当然のことながら、今回の調査の対象地となった秋月遺跡や鳴神Ⅱ～Ⅳ遺跡・音浦遺跡で確認されている集落や墓の存在と有機的な関連を有する古墳群である。また、鳴神Ⅱ～Ⅳ遺跡・音浦遺跡などの鳴神地区遺跡群は紀ノ川河口部の開発と関りをもつ集団の集落として位置付けることが可能であろう。

それ以後も、秋月遺跡の中に鎮座する日前宮との関係、中世においては雑賀党や太田党などの諸勢力と関係する城館の存在からも、秋月遺跡周辺部で様々な遺跡が展開するところである。



184 花山古墳群	186 井辺前山古墳群	308 井辺遺跡	309 岡崎縄文遺跡	310 森小手穂埴輪窯跡
311 大日山Ⅰ遺跡	312 井辺Ⅰ遺跡	313 井辺Ⅱ遺跡	314 鳴神Ⅱ遺跡	315 鳴神Ⅲ遺跡
316 鳴神Ⅳ遺跡	317 鳴神貝塚	318 鳴神Ⅴ遺跡	319 音浦遺跡	320 鳴神Ⅵ遺跡
327 太田黒田遺跡	**331 秋月遺跡**	332 津秦遺跡	356 太田城跡	383 神前Ⅱ遺跡

第１図　秋月遺跡とその周辺

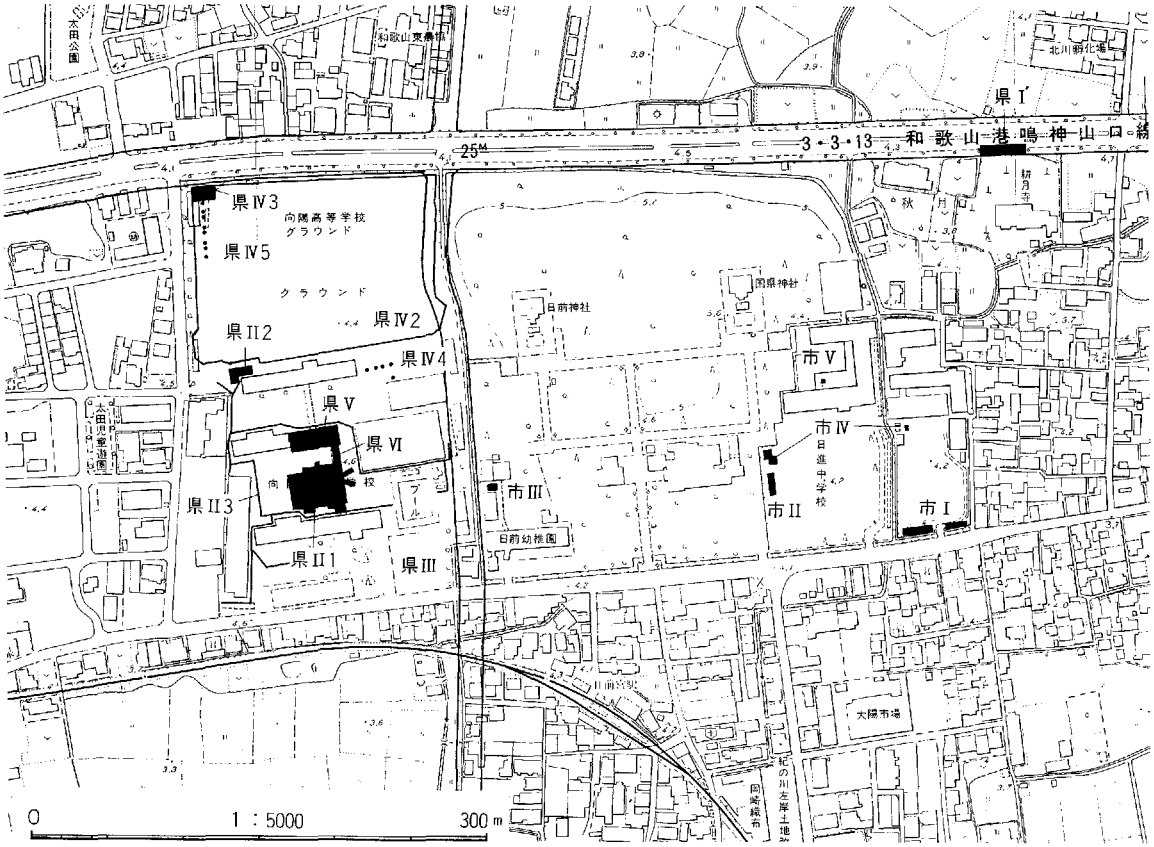
Ⅲ　調査の成果

1　調査の方法（第２・３図、図版一）

地点名称は、凡例に示した基準点より東はＥ、西はＷ、南はＳ、北はＮを冠し、これに基準点からの距離で表示した。調査地区に設定した方４ｍの小区画は、各々の北東隅の距離をもって呼称することにした。また、調査の一連の作業に併せて、調査地周辺の平板測量図を縮尺１／500で作成した。以下、年度毎に分けて記述する。

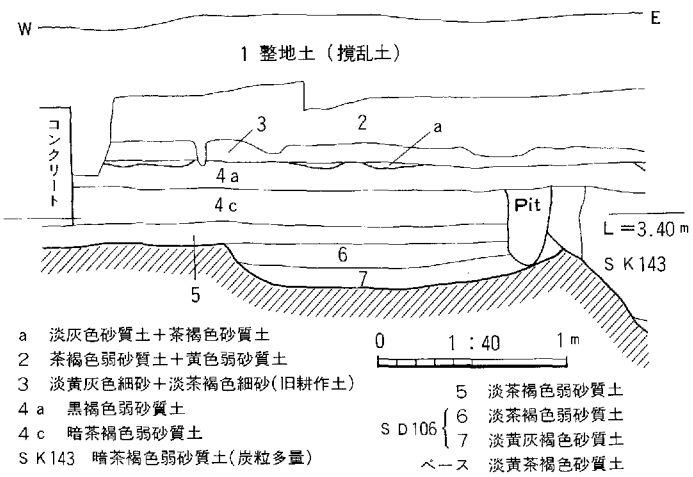
第１次調査（平成４年度）　調査は、北側の汚水槽と南側の排水溝等の関係から前述した構造物の範囲約430㎡の内の約390㎡について行なった。掘削作業は、遺物量の多い第２・３層の一部と第４層の大部分、そして以下を人力により掘削排土し作業を進めた。これら以外の上層の整地土等は、機械掘削による排土を行なった。途中、予想を上回る遺物量と掘削土量に圧倒された。

第２次調査（平成５年度）　調査区の南端では昭和60年度調査地と一部重複しており、実質的な調査面積は若干減少している。掘削作業は、第１次調査と同様に多量の遺物を含む第２層の一部と第４層以下を人力により掘削排土し作業を進めた。途中、度重なる悪天候やその後の湧水（既往の調査地の盛土の下に溜った水）に悩まされたが、一応の成果を納めることができた。



第２図　調査区位置図

2　基本層序（第３図）



第３図　調査区基本層序図

第１層は、整地土および校舎撤去後の建物基礎の撹乱土である。第２層は、磨滅した状態の遺物が多量に出土し、色調・土質が第４層に酷似する土砂が主体を占めるため近接地ないしは当調査区周辺の第４層が第３層の上に盛られたものと考えられる。第３層は、遺物が比較的少なく江戸時代～明治の耕作土と考えられる。第４層は、平安時代末～室町時代初頭の遺物を多量に包含する層で、昭和60年度調査地から当調査区の南西側にかけて集中する傾向がある。もう少し詳細にみると、第４層はａ層～ｃ層の三層に区別することができ、第４ａ層は室町時代初頭の、第４ｃ層は平安時代末の、第４ｂ層はその途中の時期の整地層と考えられる。本来、今回検出した掘立柱建物の一部や土坑ＳＫ６などは第４ａ層除去面から掘削されていたものと考えられる。第５層は、古墳時代の遺物を包含する層で、遺物量は第４層とは対照的に少ない。ベースは、大別して調査区の西半と東半で異なり、東側ほど砂質になる。

遺構検出面の高さは、全体に西側と南側ほど低くなる傾向にあり、大別して三面に分けることができる。

3　検出遺構と出土遺物

第一遺構検出面（上面）は、旧耕作土を除去した面での室町時代初頭以後の土坑・溝および近代から旧校舎建築以前の畑の畝跡・ゴミ捨て穴などが、第二遺構検出面（中面）では奈良時代～室町時代初頭の掘立柱建物・井戸・土坑・溝などが、第三遺構検出面（下面）では庄内式併行期の井戸・溝、古墳時代の方墳・溝・甕棺墓・土壙墓・土坑などが存在する。

遺物は各時代の遺構・遺物包含層から大量に出土している。大半は、土師器・須恵器・瓦器などの土器類で占められ、通常の遺物収納コンテナにして約300箱分ある。調査の進行上、第２層に多量に包含する遺物の大半は放棄せざるを得なかった。

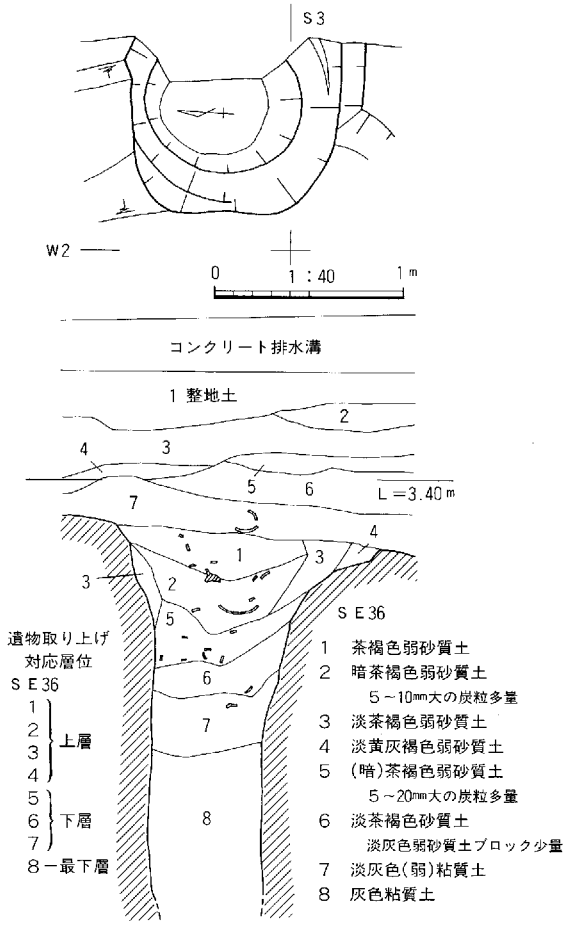
以下、第１次調査と第２次調査を併せて時代の古い検出遺構・出土遺物から順に記述する。

（１）第三遺構面（下面）（第６・７図、図版二・九）

第三遺構面での遺構は、その重複関係と出土遺物からみて四時期に大別することができる。

庄内式併行期

2次井戸ＳＥ36（第4・25図、図版九・十一）　掘り込みは検出面で径1.3ｍを測り、円形を呈する。断面形はラッパ状に開き、深さ2ｍ以上、径0.55ｍを測る。埋土は、上層（第1～4層）がレンズ状に落ち込み、遺物量が最も多い。次いで、下層（第5～7層）に遺物が多く、若干レンズ状に落ち込む。最下層（第8層）では、遺物量も少なくなり、灰色粘質土が堆積している。遺物は壷（1～4）・甕（5～8）・高坏（11・12）・鉢（9・10・13・14）などがあり、河内庄内甕の小片が認められる。上層から最下層まであまり時期差がないと考えられ、埋土堆積は庄内式併行期の短期間に埋没したものである。



第4図　2次井戸ＳＥ36実測図

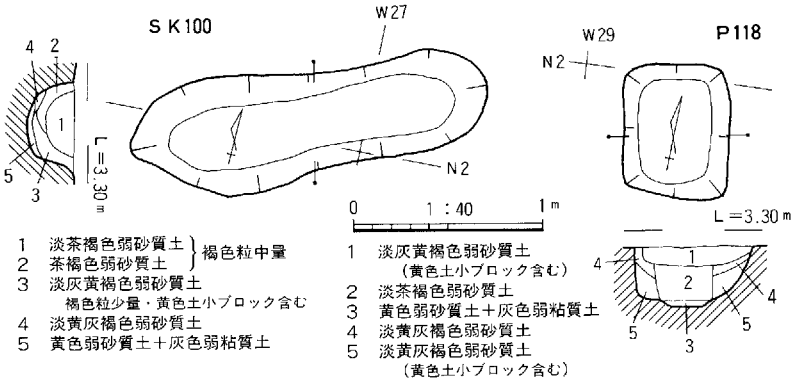
溝ＳＤ101　調査区を北東から南西にかけて斜めに横切る幅0.75ｍ、深さ5～10cmの浅い溝で、延長22ｍ分を検出した。遺物は壷・甕底部・河内庄内甕・粗い胎土の甕の破片が少量出土している。平面検出時には、ＳＤ105・106・ＳＫ142との関係を明らかにできなかったが、遺物から何れの遺構よりも古いものと考えられる。

溝ＳＤ105・126・127　調査区を北西から南東にかけて斜めに横切る幅0.7～1ｍ、深さ20cmの溝で、延長11.5ｍ分を検出した。他遺構との重複が著しく、溝そのものの遺存状態はあまり良好でない。遺物は庄内式併行期の甕が多く、二重口縁壷・高坏などが少量出土している。

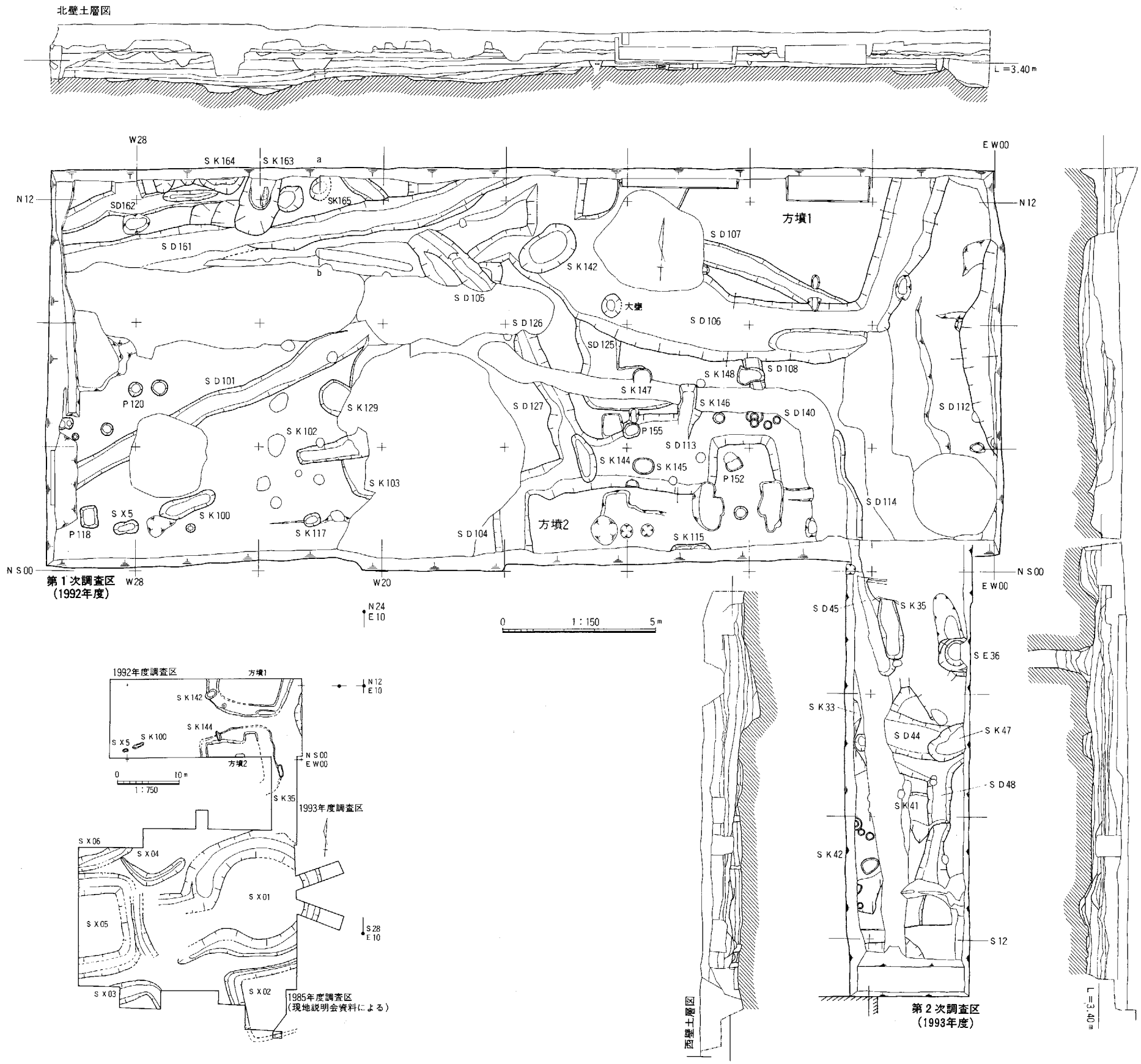
布留式併行期

布留式併行期とした土坑や柱穴の中には、庄内式併行期に遡り得るものがあるかもしれない。

土坑ＳＫ146　一部がＳＤ109・113に削り取られる。平面形は長方形を呈し、長



第5図　土坑ＳＫ100・柱穴Ｐ118実測図



第7図　調査遺構位置関係図

第6図　第三遺構面(下面)調査遺構全体図

軸1.8m、短軸0.8m、深さ50cmを測る。遺物は出土していない。

土坑ＳＫ147　平面形は方形を呈するものと考えられ、東西0.6m、深さ40cmを測る。遺物は土師器の小片が微量出土している。

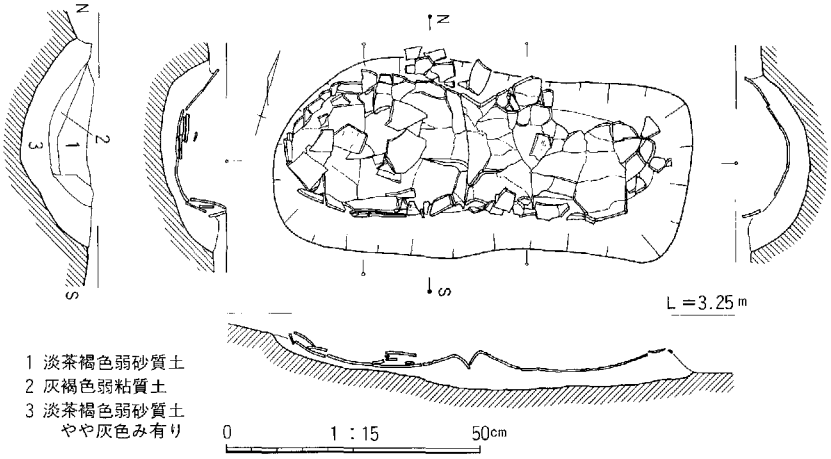
土坑ＳＫ148　一部がＳＤ108に削り取られる。平面形は楕円形を呈し、長軸0.9m、短軸0.75m、深さ40cmを測る。遺物は土師器の小片が少量出土している。

柱穴Ｐ118（第５図）　調査区の南西隅にあって方形を呈し、南北0.7m、東西0.62m、深さ30cmを測る。遺物は平底の甕底部・壷・布留式甕の小片が微量出土している。

古墳時代中期～後期

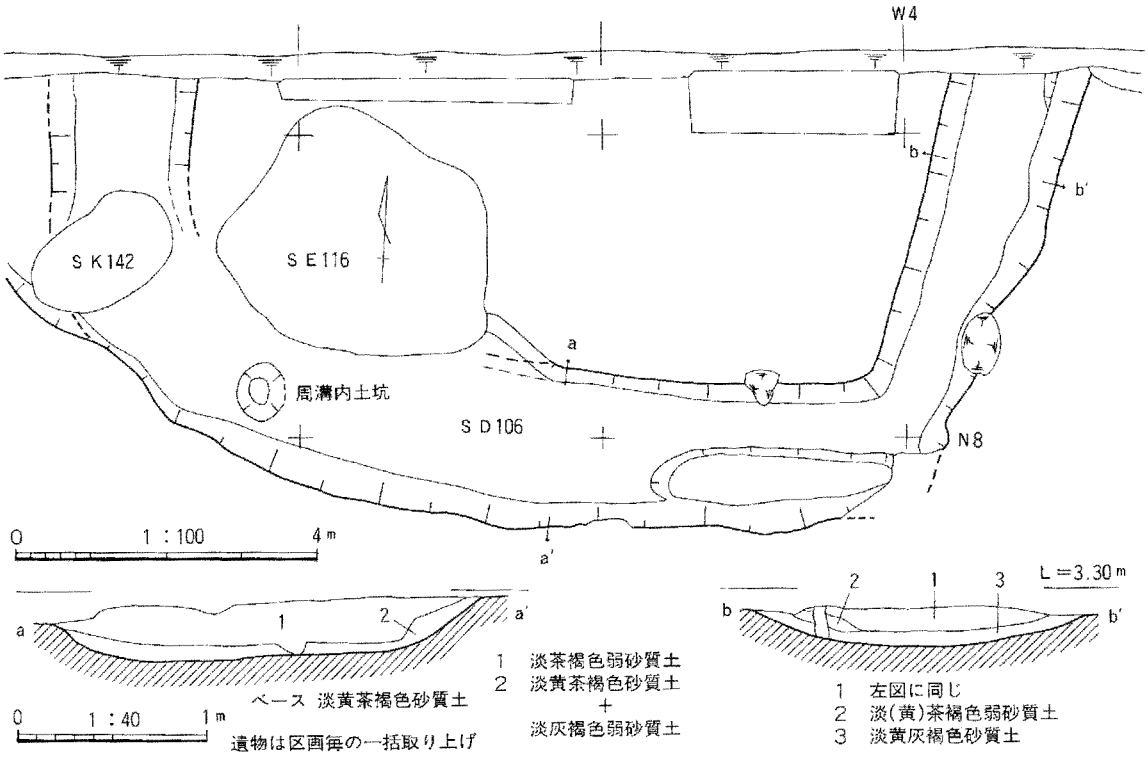
土坑ＳＫ100（第５図、図版二）　平面形が東西に長い楕円形を呈し、長軸1.9m、短軸0.5m、深さ25cmを測る。遺物は古墳時代の土師器壷・甕、須恵器の小片が１片出土している。平面形、規模、埋土の状況から土壙墓の可能性が考えられる。

甕棺墓ＳＸ５（第８・26図、図版二・十二）　調査区の南西隅にあって、上半の一部が校舎の基礎部分の掘削によって削り取られていた。検出状況から判断して、甕を横たえるに際しやや大きめの掘形を掘削し、安定をよくするため第３層を充填している。甕の内底には厚さ２mm前後の灰色粘質土が堆積し、その後ほとんど土砂が流入していない空洞状態で土圧等により上半部が陥没し、第２層が堆積したものと考えられる。遺物は長胴形態の甕が２個体（22・23）横たえられており、形態・技法の特徴から５世紀後半～６世紀初頭にかけて埋設されたものと考えられる。



第８図　甕棺墓ＳＸ５実測図

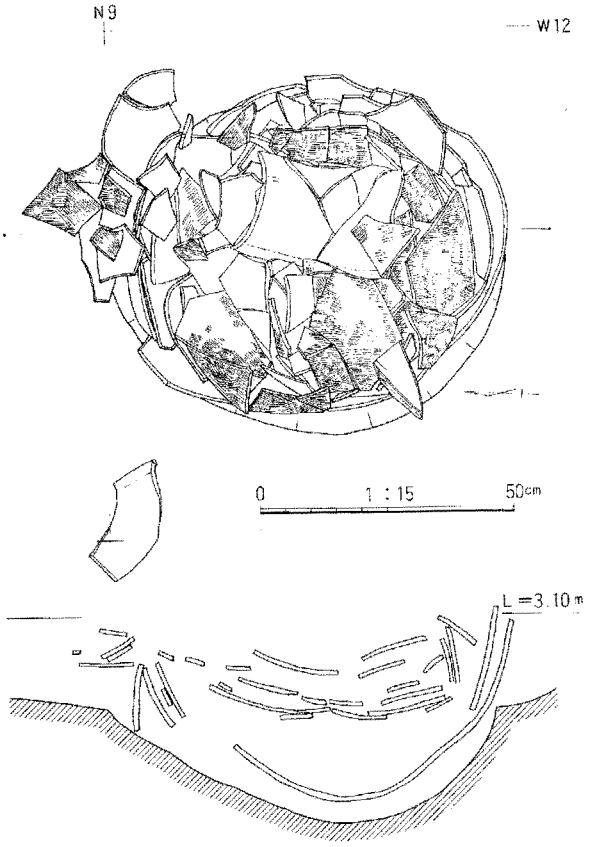
方墳１（第９・26図、図版三・十二）　方墳の周溝を検出したに留まる。周溝の内辺で東西9.5～10m、外辺で約13mを測る。主軸方位はＮ－10°－Ｅに振る。周溝は南辺で幅2.2m、深さ35cm、東辺で幅1.7m、深さ20～25cmを測り、南辺の東側の一部で更に凹む状態になっている。遺物は東辺周溝から須恵器甕（27）、土師器甕・高坏などが出土しているが、完全な形で出土したものは甕と後述する須恵器大形甕（28）のみである。須恵器坏身（25）、坏蓋（24）などの破片は、周溝埋没の過程で入り込んだものと考えられ、庄内式併行期の遺物も数多く見受けられる。



第９図　方墳１実測図

周溝ＳＤ106内土坑（第10・26図、図版三・十一）

土坑の掘形は、南北0.8ｍ、東西0.6ｍ、深さ25cmを測る。須恵器の底部は土坑の底に埋め置かれた状態で、胴部から口縁部にかけての大半の破片は破砕した状態で内側に落ち込んでいた。口縁部の一部は、本体からやや離れた西側で検出されている。大形甕（28）は、口径43～44.5cm、高さ103cm、胴部最大径は胴部中位に位置し76cmを測る。肩部には、対になる乳状突起が一対付加されている。底部の一部には、焼成時の当て物による焼き歪みにより大きく凹み亀裂を生じている。口縁部から肩部にかけて、薄い灰緑色の自然釉が一部まばらにかかっている。頸部外面下位には12本／cm程度のハケ目が、胴部外面は横方向の平行タタキが施されタタキの重なり部分のみナデ



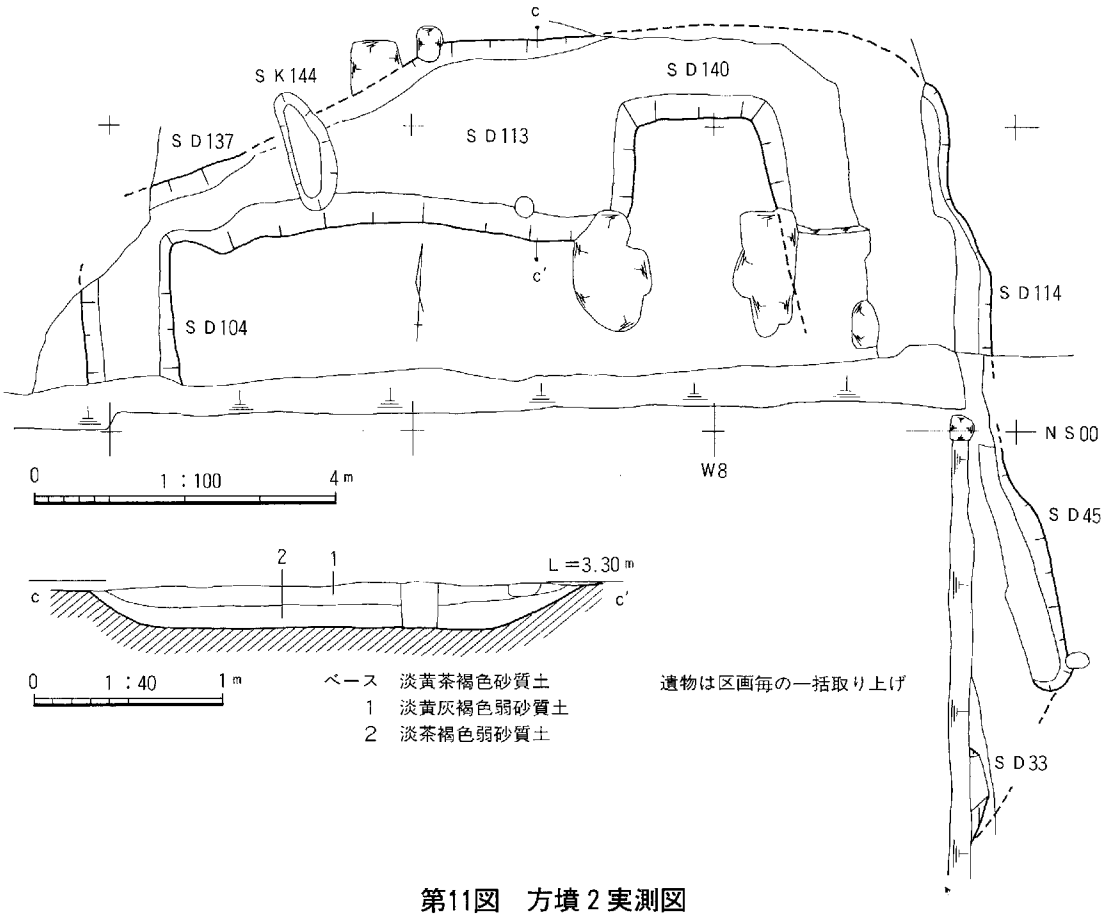
第10図　方墳１周溝ＳＤ106内土坑実測図

る。胴部内面はナデ調整しているが、僅かに同心円文が、底部内面に絞り目痕跡が残っている。胎土には１㎜までの白色砂粒を僅かに含み、色調は灰白色みを呈している。焼成はやや軟質の状態にみえる。

方墳２（第11・25図、図版四・十一）　方墳の周溝の北東域を検出したに留まる。他遺構との重複が著しく、周溝そのものの遺存状態は良好とはいえない。方墳２の規模は、周溝の内辺で東西7.8～8.2ｍ、外辺で約12ｍを測る。周溝は北辺で幅1.6ｍ前後、深さ25㎝、東辺で幅2.4ｍ、深さ約10㎝、西辺で幅1.2ｍ、深さ20㎝を測り、北辺で東側に東西1.8ｍ、南北1.6ｍの張出しが認められる。主軸方位はＮ－７°－Ｗに振る。遺物は西辺周溝（ＳＤ104）から土師器鉢（15）、須恵器甕・瓶などが出土している。また、今回の調査で唯一弥生時代前期と考えられる甕底部（16）も出土している。

土坑ＳＫ115（図版四）　方墳２の南側で、調査区の南壁に接して位置する。掘形は二段になり、長軸1.4ｍ、幅0.2ｍ以上、深さ30～70㎝を測る。遺物は土師器甕の破片が出土している。

溝ＳＤ112　検出幅1.1ｍ、深さ約70㎝、延長９ｍ分を検出した。埋土は他の古墳時代の遺構と異なり、灰褐色砂質土が堆積していた。遺物は庄内式併行期の甕・高坏、須恵器蓋・甕と共に12世紀中頃の土器を若干含んでいる。東壁土層と出土遺物から、古墳時代と異なる可能性もある。

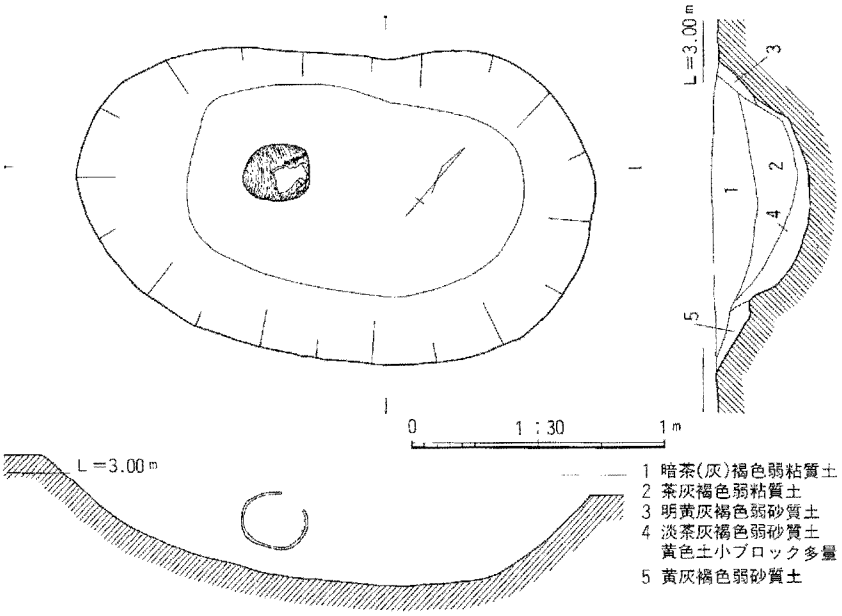


第11図　方墳２実測図

溝ＳＤ125・108　ＳＤ125は幅1.2ｍ、深さ約10cmで「Ｌ」字状に折れ曲がり、ＳＤ108と対応位置にあって方形の区画を成すものと考えられる。方形の内辺で約４ｍを測り、北辺はＳＤ106の掘り過ぎた部分（ＳＥ116の東側）に対応する可能性がある。遺物はＳＤ125から須恵器坏蓋・壺などの小破片が微量出土しているに過ぎない。

土坑ＳＫ163　ＳＤ62の底面で検出した。隅丸長方形を呈し、長軸1.95ｍ以上、短軸1.15ｍ、深さ30cmを測る。土坑のほぼ中央に長さ50cm、幅20cmの扁平な板石（結晶片岩）が横たえられていた。遺物は土師器甕・堝が少量出土している。調査区北壁の土層観察からＳＫ163よりＳＫ164が古く、遺物から６世紀後半から７世紀前半と考えられる。

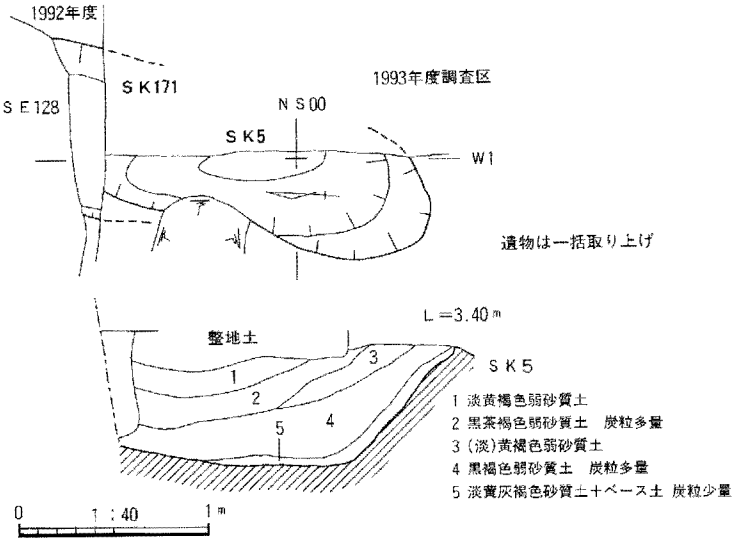
土壙墓ＳＫ142（第12・25図、図版十二）　ＳＤ101・106と重複する位置にある。長軸２ｍ、短軸1.2ｍ、深さ50cmの土坑で、本来、ＳＤ106埋土の上面から切り込まれたものと考えられるが、ＳＤ106埋土掘削後に検出するに至った。埋土の第４層は、ベース土が多量に混入し人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は庄内式併行期の壺・甕の小破片を含むが、土坑の基底部から約10cm浮いた状態で、口縁部を欠く横瓶（21）が横たえられた状態で出土した。



第12図　土壙墓ＳＫ142実測図

（２）第二遺構面（中面）（第16・17図、図版五・十）

第二遺構面での大半の遺構は、基本堆積層第４層除去面（第５層上面）において検出したものである。

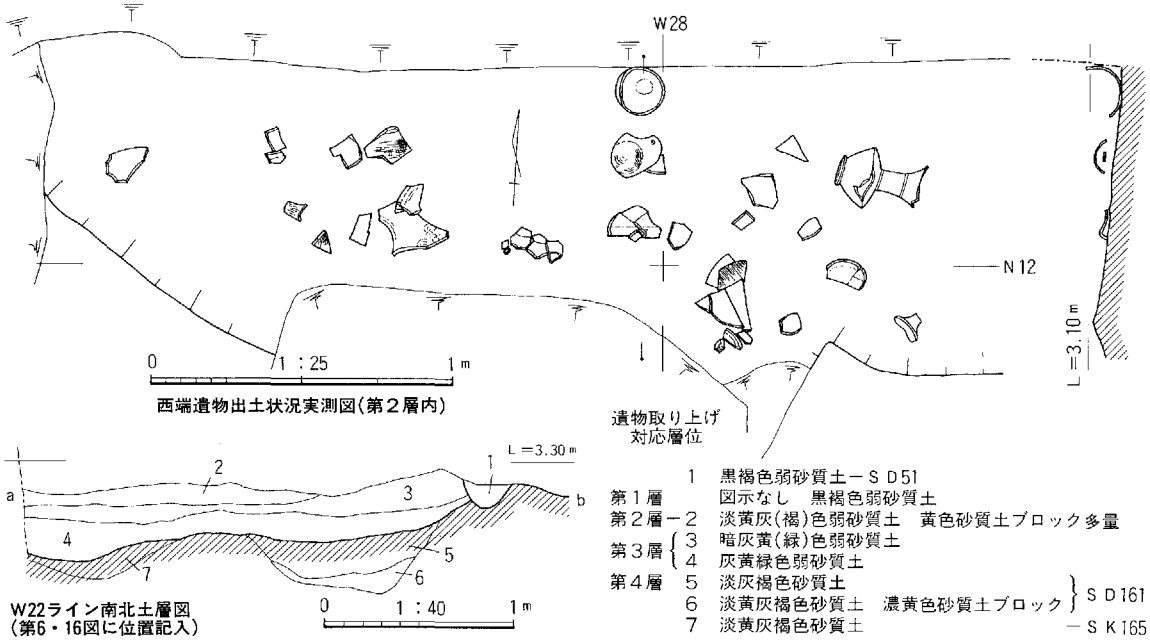


第13図　土坑ＳＫ171・２次土坑ＳＫ５実測図

奈良時代

土坑ＳＫ171・２次土坑ＳＫ５（第13・27図、図版十二）　１次・２次の両調査区にかかる土坑で、長軸２ｍ、短軸0.9ｍ以上、深さ65㎝で、南北に長い楕円形を呈する。埋土は、炭粒を多量に含む第２・４層で構成される特徴があり、締まりのない堆積土である。遺物は第４層からの出土が多く、比較的まとまりのある土師器甕（35）・堝（36）・竈・製塩土器・須恵器坏（30・31）・蓋（33・34）などがあり、平城宮Ｉ期に併行するものと考えられる。

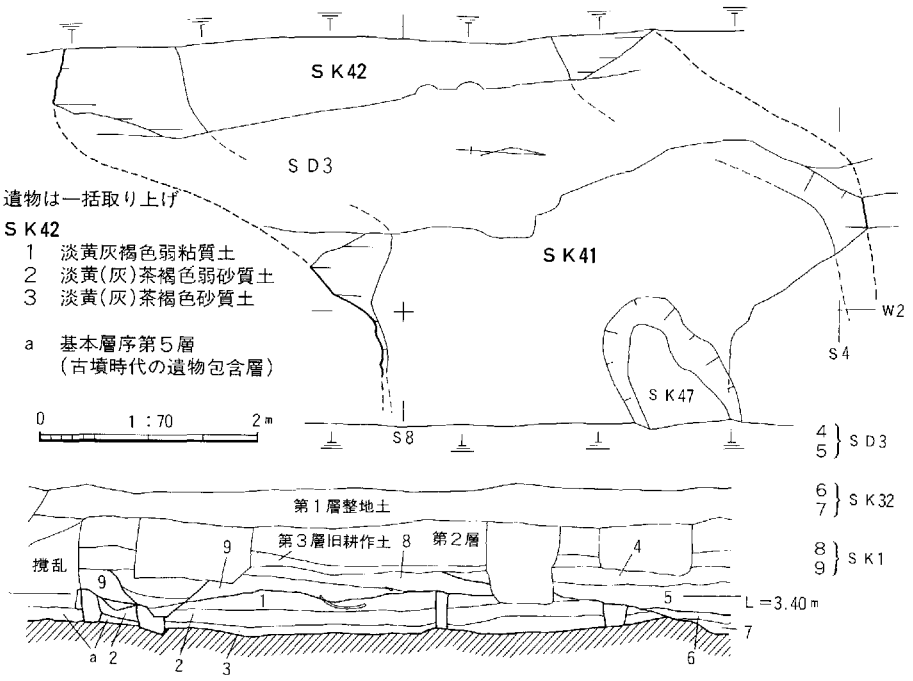
溝ＳＤ62（第14・27・28図、図版五・十二・十三）　ＳＤ161やＳＫ163～165上に重複して位置し、東北東から南南西に延びる溝である。検出最大幅は３ｍ、深さ40～60㎝、延長15ｍ分を検出した。埋土は、大きく３層に分けることができる。第１層は土層図に示していないが上層部分やある一部で中世遺物を若干含む。遺物は全層平均して出土量が多く、平面的にも検出した溝内全域にわたって出土する（収納コンテナ27箱分）。第２層下部では図示したような完形品や大振りの破片の出土がみられ、ある時期第４層上面（第３層は部分的な堆積）に面的に投棄した状況が伺えられる。また土器類と共にW20～28の広範囲にかけて獣骨（馬）が出土している。遺物は、下部に存在する６世紀末～７世紀にかけての遺構の遺物と考えられるものがかなりの量で混っている。土師器では皿（37・38）・蓋・高坏（39～41）・甕（42～46）・堝・竈、須恵器では皿（47）・坏Ａ（48～54）・坏Ｂ（55・56）・蓋（57・58）・高坏（60）・長頸壺（63）・横瓶・提瓶（64・65）・平瓶（62）・甕（66～71）、鉄釘などが出土している。遺物の全体の傾向として土師器では皿・蓋・高坏が少なく、甕・堝が非常に多い。須恵器では甕が最も多く、次いで坏Ａ・坏Ｂが多く、蓋・高坏・壺・横瓶などは少ない。ＳＤ62の本来の遺物は、平城宮Ｉ・Ⅱ期に併行するものと考えられる。



第14図　溝ＳＤ62実測図

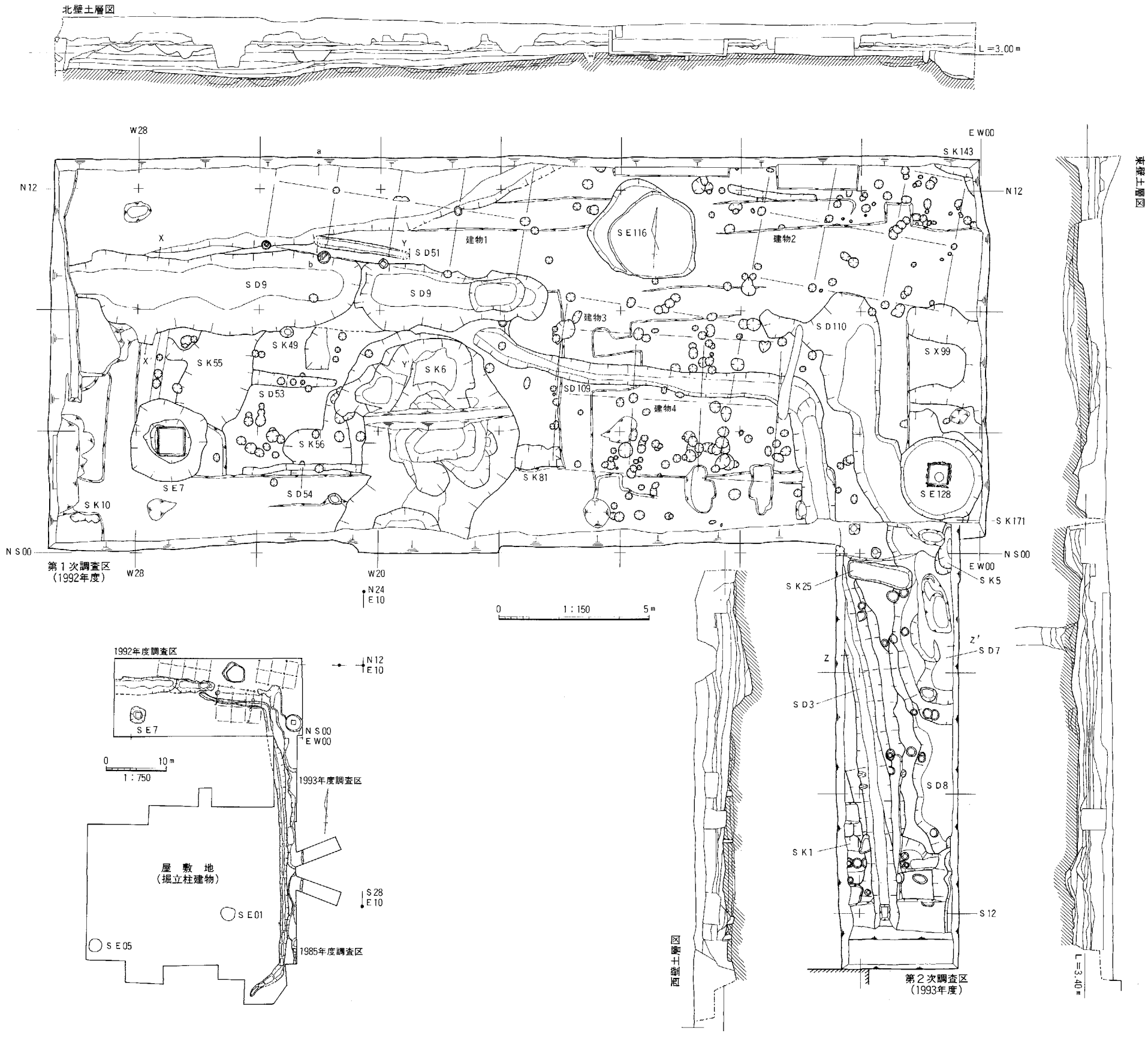
平安時代～室町時代初頭

２次土坑ＳＫ41・42（第15・26・28図、図版十一）　新しい時期の遺構の掘削により平面形は明確でないが、南北5.4ｍ、深さ40㎝で東西方向に延びる土坑状の遺構である。調査時には須恵器壺（29）の破片がＳＫ41・42に散らばっていることから古墳時代の遺構と考え掘削していたが、遺物・土層を検討した結果、平安時代の遺構と判断するに至った。古墳時代の遺構であれば基本層序第５層の除去面での検出であるが、ＳＫ42は第５層に掘り込まれている。遺物は奈良時代の土器を少量含むが、主体は多段ナデ手法を伴う土師器椀（72・73）・皿（74）・黒色土器Ｂ類椀などの10世紀末～11世紀初頭のものである。すると、ほぼ完形で折り重なって出土した（西壁へ入り込む）須恵器壺（29）が、どの遺構に伴うものか判断し難い。



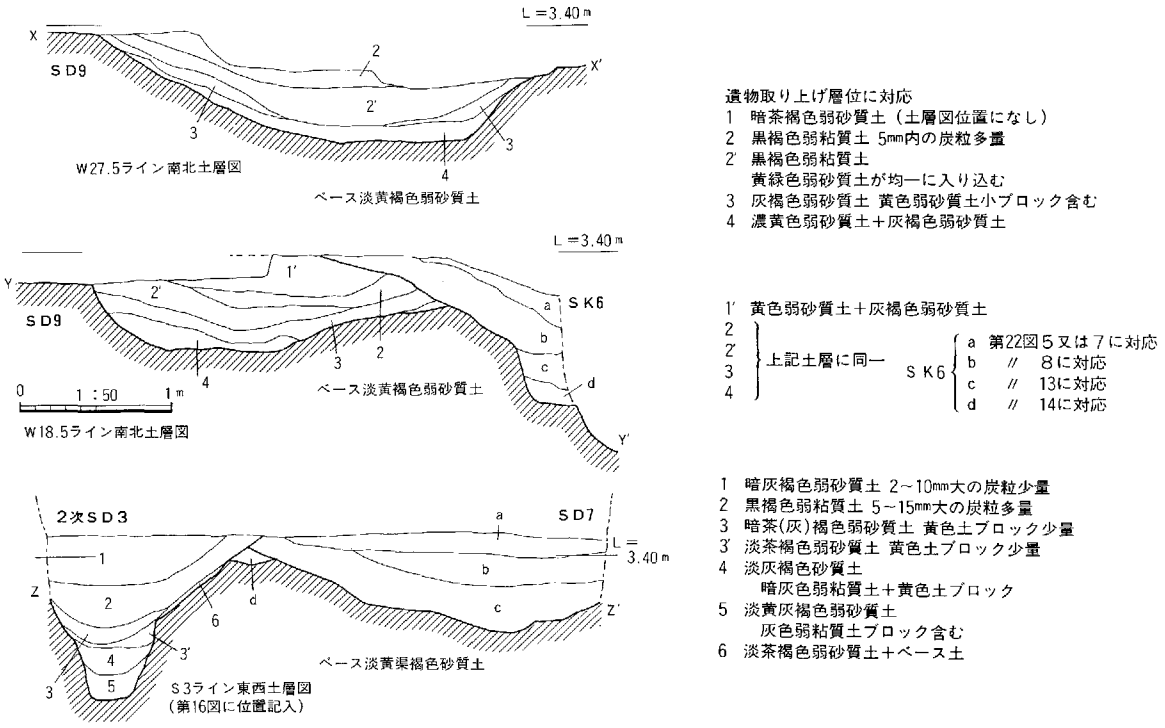
第15図　２次土坑ＳＫ41・ＳＫ42実測図

溝ＳＤ９（第18・29図、図版十三）　他遺構との重複が著しいが、幅約３ｍ、深さ75㎝で、延長16ｍ分を検出した。掘り込みは南側が緩やかで、北側がやや傾斜の強い状態にある。W20～22付近で、底面の深さが両側より約30㎝浅くなる部分が存在する。埋土は、第４層が自然堆積で、それ以外は人為的に埋め戻された堆積土と考えられる。遺物は、第２層から大量の土師器皿を主体とした土器類が出土している（収納コンテナ45箱分）。第１′・２′層にも比較的多いが、第２層の下部には堆積土より土器の方が多いような状態でレンズ状に堆積する部分が多かった。遺物は底部糸切りの土師器大皿（77～84）・小皿（85～97）を主体として、土師器脚台付皿（100～102）・外反口縁の大皿（98・99）・土釜（107・108）、瓦器椀・小皿、瓦質須恵器甕、須恵質捏鉢（110～112）、白磁碗（113）・皿、土錘、瓦、砥石などが出土している。上記の遺物に混じって、比較的多くの古墳～奈良時代の遺物も出土している。



第17図　調査遺構位置関係図

第16図　第二遺構面(中面)調査遺構全体図



第18図　溝ＳＤ９・２次溝ＳＤ３・ＳＤ７土層図

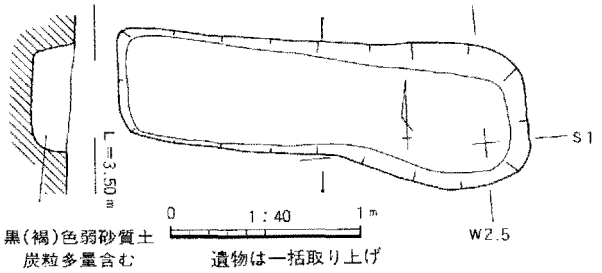
溝ＳＤ109（第30図、図版十三・十四）　ＳＤ９との新旧関係を明らかにできなかったが、状況から判断して同時に埋め戻されたものと考えられる。溝の掘り込みは断面「Ｕ」字形を呈する。一部で底面が一段深く掘り込まれている。幅1.4～1.6ｍ、深さ60㎝で、Ｗ６付近で南側に折れ曲がり、後述する２次ＳＤ３に続いていく。埋土の堆積・遺物の出土状況はＳＤ９に類似する。遺物は底部糸切りの土師器大皿（115～117）・小皿（118～121）を主体とする（収納コンテナ15箱分）。

２次溝ＳＤ３（第18・24・30図、図版十・十四）　ＳＤ109に連続する溝で、最大幅２ｍ、深さ1.1ｍを測る。南端は1985年度調査区と重複している。掘り込みは、上部60㎝までが緩やかに傾斜し、下部50㎝は断面「Ｕ」字形を呈している。埋土の状況から、第３層の下部が一時期の溝の底を成していた可能性が考えられる。遺物は第１層から小破片が多いのに対し、第２層中位から下部にかけて土師器大皿（126～133）・小皿（134～138）を主体として、土釜（141）・甑（142・143）・竈（278）・鉢（140）などがある（収納コンテナ22箱分）。なお、ＳＤ109・２次ＳＤ３と1985年度調査溝とで「コ」の字形の配置（第17図）を示し、南北約48ｍを測ることになる。

溝ＳＤ110（第31図）　**２次溝ＳＤ７・８**（第18図）　やや不整形な平面形であるが、南北方向に延びる幅1.6～２ｍ、深さ30～60㎝の溝である。ＳＤ109・２次ＳＤ３を取り囲むように位置しており、土層から内側の溝に先行するものである。この状況は1985年度調査区（第17図）でも続いている。遺物は土師器大皿（144）・小皿・堝（148）・甕（149）・土釜、瓦器椀（146）・小皿（147）、須恵質捏鉢（150）などがある。遺物は内側の溝とは対照的に小破片が多く（収納コンテ

ナ４箱分）内側のものより若干古い様相を示している。なお、本来はＳＤ９もＳＤ110・２次ＳＤ７・８に続くのであろうが、ＳＤ109・２次ＳＤ３の掘削に際してＳＤ９そのものが再掘削された可能性が考えられる。

２次土坑ＳＫ25（第19図）　長軸2.1ｍ、短軸0.6ｍ、深さ25㎝で、長方形を呈する。埋土には多量の炭粒が混じっている。遺物は土師器大皿・小皿・甕・土釜、瓦器椀・小皿、須恵質捏鉢などがあり、２次ＳＤ３より古い様相が存在する。



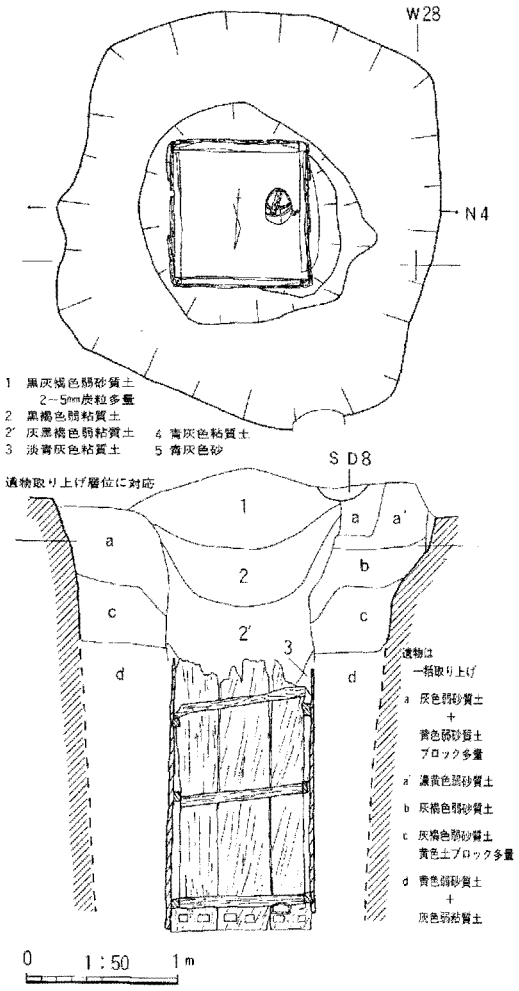
第19図　２次土坑ＳＫ25実測図

南西隅遺構？（第31図）　調査区の南西隅で東西1.5ｍ、南北0.85ｍ、厚さ25㎝にわたり炭粒の非常に多い黒褐色粘質土が認められた。堆積土より土器の方が多い状況で、遺物は破砕した状態の底部糸切りの土師器大皿（152～155）・小皿（156～160）を主体として、土釜、瓦器椀などが出土している（収納コンテナ６箱分）。

掘立柱建物１　桁行４間（8.10ｍ）・梁行１間（2.10ｍ）以上の東西棟の建物である。桁行主軸方向はＮ－82°30′－Ｗである。柱間は西端の１間分（1.90ｍ）を省けば比較的揃っており、2.00～2.20ｍを測る。建物は遺構の重複からＳＤ９より新しく、ＳＫ６より古いと考えられる。

掘立柱建物２　桁行３間（6.45ｍ）・梁行２間（4.45ｍ）の東西棟の建物である。桁行主軸方向はＮ－80°30′－Ｗである。柱間は比較的揃っており、2.15～2.30ｍを測る。柱穴の一部はＳＫ143と重複する部分で検出できなかったことから、これらの遺構より古い12世紀代の可能性もある。

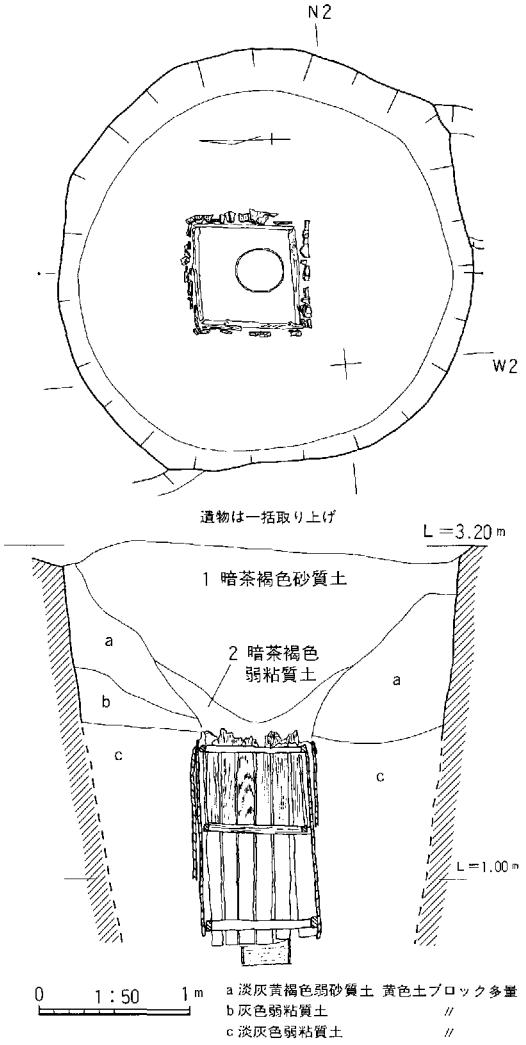
建物３・４共にＳＤ109より新しい。その他、平安時代末～室町時代初頭と考えられる多数の柱穴を検出した。柱穴から出土した遺物から、主体は14世紀代にあるものと考えられる。



第20図　井戸ＳＥ７実測図

井戸ＳＥ７（第20・31図、図版六・十四・十五）　掘形は検出面で、一辺約2.5ｍの歪つな隅丸方形を呈する。井側は内辺90～92㎝の方形の縦板組みの構造である。各辺に幅約30㎝、厚さ４㎝弱の縦板３枚を立てかけ、四天柱と３段の横桟で固定されている。縦板は状態の良好なもので約1.8ｍ分が遺存していた。縦板の下端には、湧水の流れをよくするため板材一枚に対し２孔ずつの穴を穿っている。調査時に井側内第５層の深さから著しい湧水があり、縦板の下端で標高0.45ｍを測る。埋土は大きく５層に区別でき、途中から人為的に埋め戻されたものと考えられる。第５層面において曲物製釣瓶（301）が出土している。遺物は掘形内では底部糸切りの土師器大皿・小皿を主体とした小片が非常に多く、井側内でも第１・２層は小片が多い。次いで下層に下がるに連れ遺物量を減じるが、第３層で土師器大皿（161）・第４層で土師器小皿（163～165）、瓦器椀（168）の完形品が出土している。その他、底部糸切りの土師器大皿・小皿を主体とし、土釜、瓦器小椀（169・170）・小皿、瓦質鉢（171）、須恵質捏鉢・甕、丹波焼甕（172）、白磁碗・皿、土錘（173）、瓦（174～176）などが出土している（第１層で収納コンテナ５箱分、第２層で6.5箱分、第３層で２箱分、第４層で2.5箱分）。また、第３層下部から第４層を中心として、木葉、桃の種、水苔、昆虫の羽根、藁、竹、炭化米、曲物蓋、板材などが出土している。遺物から、井戸は12世紀中頃から後半にかけて機能し、12世紀末～13世紀前半に埋め戻され、13世紀中頃には完全に埋没したものと考えられる。

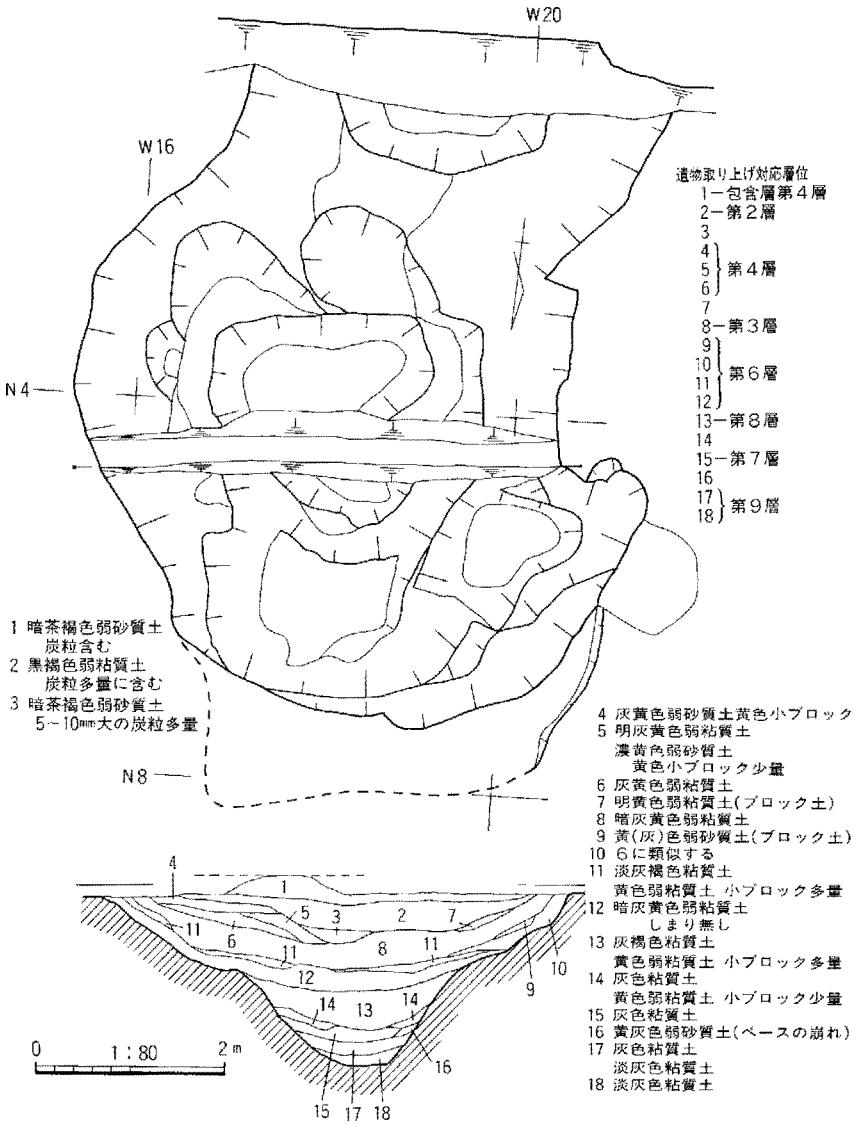
井戸ＳＥ116（第31図、図版七）　掘形は検出面で約2.8ｍ、下部で径1.9ｍの歪つな円形を呈する。井側は径約60㎝の円形を呈する石組である。ＳＥ116は調査途中、雨水による土砂の大崩落のため完掘できなかった。土層の観察において、石組の中心付近から上に約90㎝の長さにわたり竹筒の痕跡を認めることができた。石組は20～60㎝大の結晶片岩や川原石を利用して積まれており、60㎝の深さまで認めることができた。埋土は全て人為的に埋め戻されたものと考えられ、大きく三層に区別できる。井側内下部から曲物蓋、柄付き鉄鎌などが出土している。遺物は底部糸切りの土師



第21図　井戸ＳＥ128実測図

器皿を若干含むが、底部未調整の土師器大皿・小皿・上釜、瓦器椀（177）、瓦質摺鉢、須恵質捏鉢、備前焼甕（179）、瓦などがある。埋土の最上層からは袋物の染付が一片出土している。遺物から、井戸は13世紀中頃から後半にかけて機能し、13世紀末～14世紀前半に埋め戻され、15世紀初頭には完全に埋没したものと考えられる。

井戸ＳＥ128（第21・32図、図版七・十五）　ＳＤ110・ＳＫ171を削り取り掘削されている。掘形は検出面で、径約2.7ｍの円形を呈する。断面形は、若干傾斜するものの直線的に立ち上がる。井側は内辺66cmの方形の縦板組みの構造である。板材は、東・南面の一番内側で、幅10cm前後、厚さ２cmの縦板６枚を、北面で縦板４枚、西面で縦板３枚を立てかけ、四天柱と３段の横桟で固定されている。縦板は各辺において、二重ないし三重になっておりＳＥ７と比較して構造上異なる。縦板は状態の良好なもので約1.45ｍ分が遺存していた。板材の下端から下部には、径32cm、深さ16cmの曲物製井筒が据え置かれていた。曲物は底部を欠いており、二重になっていた可能性もある。埋土は大きくレンズ状に堆積し、縦板が朽ちていくなかで自然に埋没したような様相を呈している。遺物は底部未調整の土師器大皿(180・181)・小皿（182～187）・脚台付皿・上釜（190・191）・土鍋（192・193）・捏鉢（195）、瓦器椀、瓦質捏鉢・甕、須恵質捏鉢（196～198）、常滑焼甕、備前焼、青磁の碗（200）、白磁鉢（199）、瓦（201・202）が出土している。遺物から、井戸は14世紀前



第22図　土坑ＳＫ６実測図

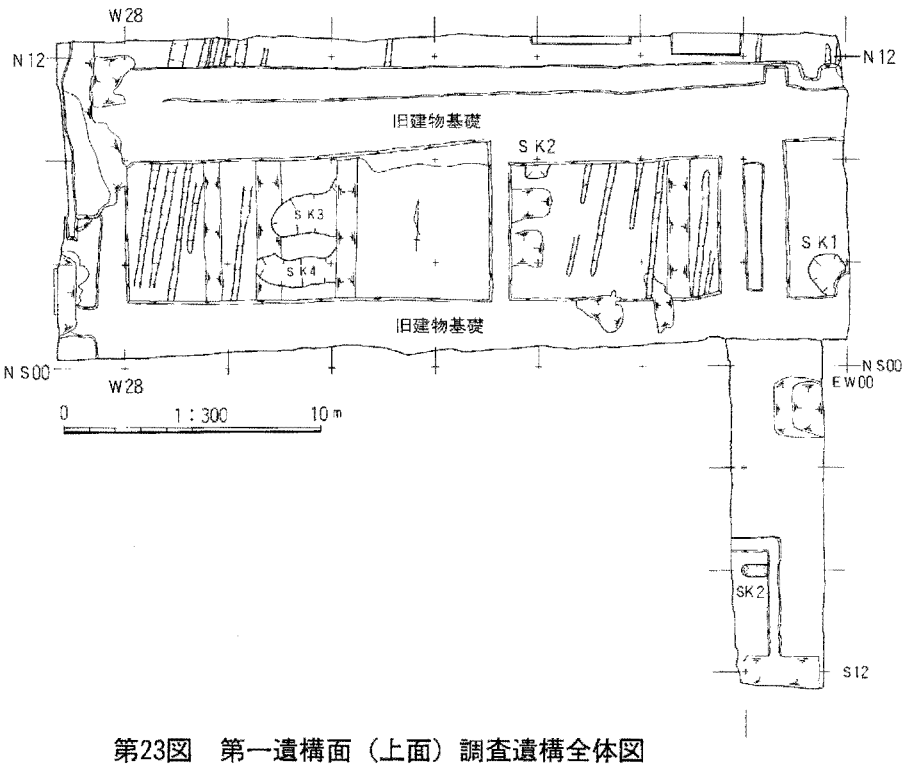
半～中頃にかけて機能し、14世紀後半に埋没したものと考えられる。

ＳＫ６（第22・33・34図、図版八・十五）　ＳＫ６の本来の検出面は、基本層序第４ａ層除去面と考えられる。基本層序第４層掘削時に、異常に炭粒の多い範囲が認められた部分が本来のＳＫ６の平面規模と考えられる。南北は北側の溝ＳＤ９に重複する部分までの8.5ｍ、東西はW14ライン～24ラインまでの約10ｍの範囲にかけて、深さ約２ｍの不整形な大形の土坑である。基底部は凹凸が著しく、土層観察用ベルトを残した部分が最も深く、各方向にステップ状の段を有したものと考えられる。埋土は全て人為的に埋め戻された堆積土と考えられ、第１～３層、第４～12層、第13～14層、第15～18層の大きく４分することができる。下層になるにしたがって、古い時期の遺物を多く含む傾向にある。遺物は土師器大皿（208～218）・小皿（219～229）・土釜（247・248）・土堝（249～251）・土錘、瓦器椀（230～240）・小椀（241・242）・小皿（243・244）・鉢・手捏ね土器、瓦質三足釜（259）・甕（257・258）・火鉢（256）、青磁碗（261～266）・皿・壺（269）、白磁碗（270・271）・皿（272・273）・壺（274）・水注・合子（267・268）、常滑焼甕（260）、須恵質捏鉢（253・254）、鉄釘・錐状鉄製品、板材、銅貨、石鍋（275）・砥石（277）のほか土錘、瓦が出土している。

（３）第一遺構面（上面）（第23図）

２次土坑ＳＫ２（第32図）　基本層序第４ａ層に掘り込まれた土坑である。長軸1.0ｍ、短軸0.5ｍ、深さ30cmで、土坑内に径５～10cm前後の礫が充填されていた。遺物は土師器甕（205）・土堝（203）・蛸壺（204）・瓦などがある。状況から土壙墓の可能性が考えられるが、定かでない。

その他、江戸時代～明治の耕作土と考えられる基本層序第３層除去面において、畑の畝溝を検出している。畝溝はN－7°－Eに振れる方向にある。向陽高校の南側に現在ある水田と同様の方向を示している。



第23図　第一遺構面（上面）調査遺構全体図

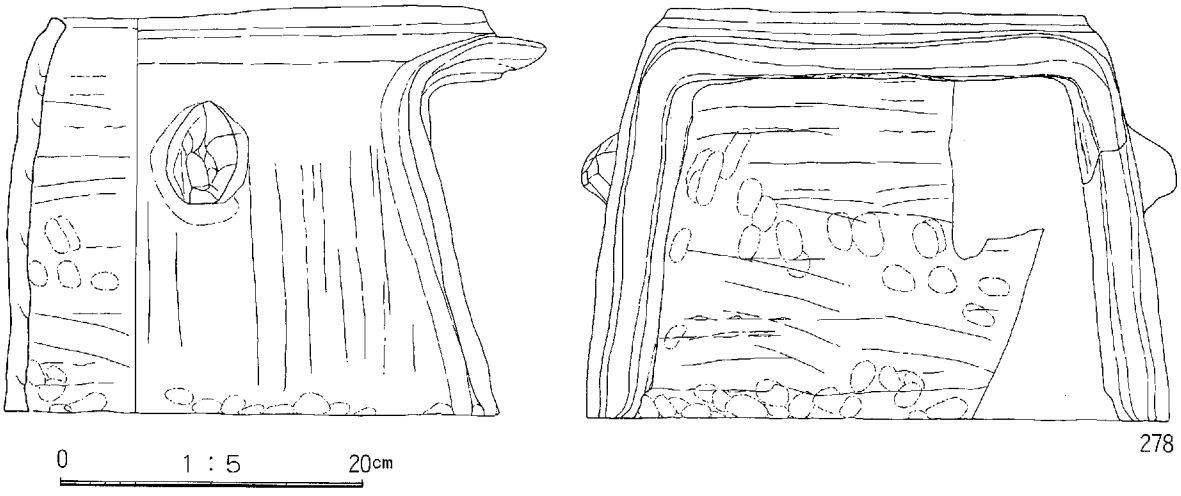
Ⅳ まとめ

今回の調査で得られた成果と既往の調査を簡単にまとめておくことにする。方墳の発見など遺構の内容としては、既往の調査成果を補強することとなった。

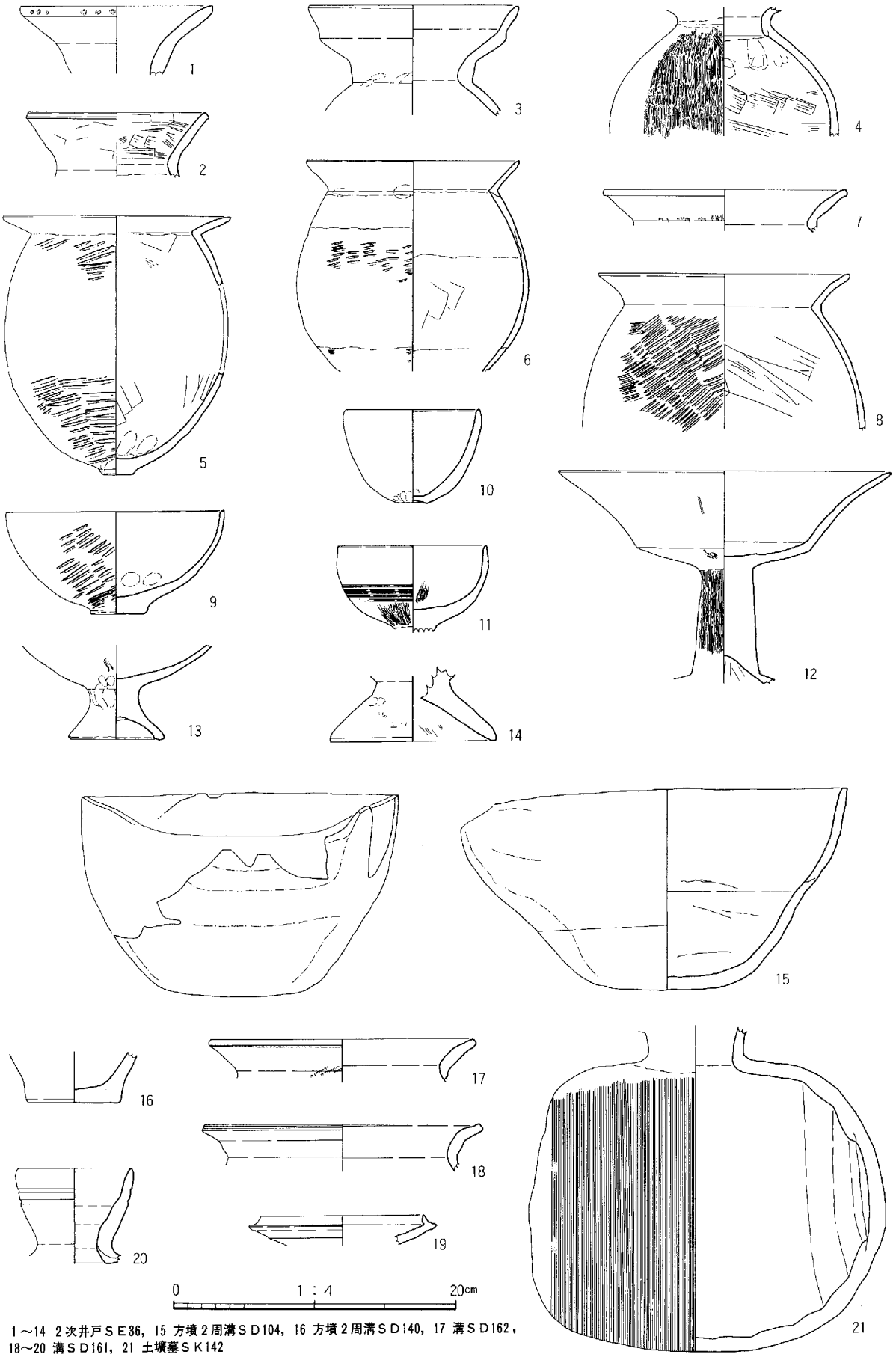
	県立向陽高校を中心とした範囲		市立日進中学校・口前幼稚園を中心とした範囲	
弥生時代前期	土器の出土		遺物包含層	
弥生時代末	集落	井戸３基・土坑・溝		
古墳時代前期～後期	墓域	前方後円墳１基・方墳７基・甕棺墓１基	集落	竪穴住居２棟
古墳時代末～奈良時代	集落	掘立柱建物・井戸１基・土坑・溝	集落	土坑
平安時代前期・中期	集落	掘立柱建物・井戸１基・土坑・溝		
後期	集落	溝で区画された屋敷地・掘立柱建物・井戸１基・土坑		
鎌倉時代	集落	掘立柱建物・井戸２基・土坑		
室町時代	集落	掘立柱建物・井戸１基・土坑		

以上のことから、秋月遺跡では西東に分かれて古墳時代の墓域と集落が存在することになる。当然、両者が直接関係するものかどうかは今後の課題である。既往の調査成果からすれば、県Ⅲと市Ⅲの調査地において沼地状の地形が確認されている。また、市Ⅰの調査地でも沼地状の地形が確認されており、地理の分野の観察においても適合するところである。この地形の拡がりや状況についても今後の課題となるが、少なくとも鎌倉時代以後に埋没したと考えられる。

平安時代後期の遺物量からは、当該調査地周辺に膨大な量の食器類を消費した特異な集落の在り方が浮き彫りにされるものである。また、それ以後室町時代にかけても、秋月遺跡を中心とした広い範囲に集落や墓域の存在を想起させるものである。

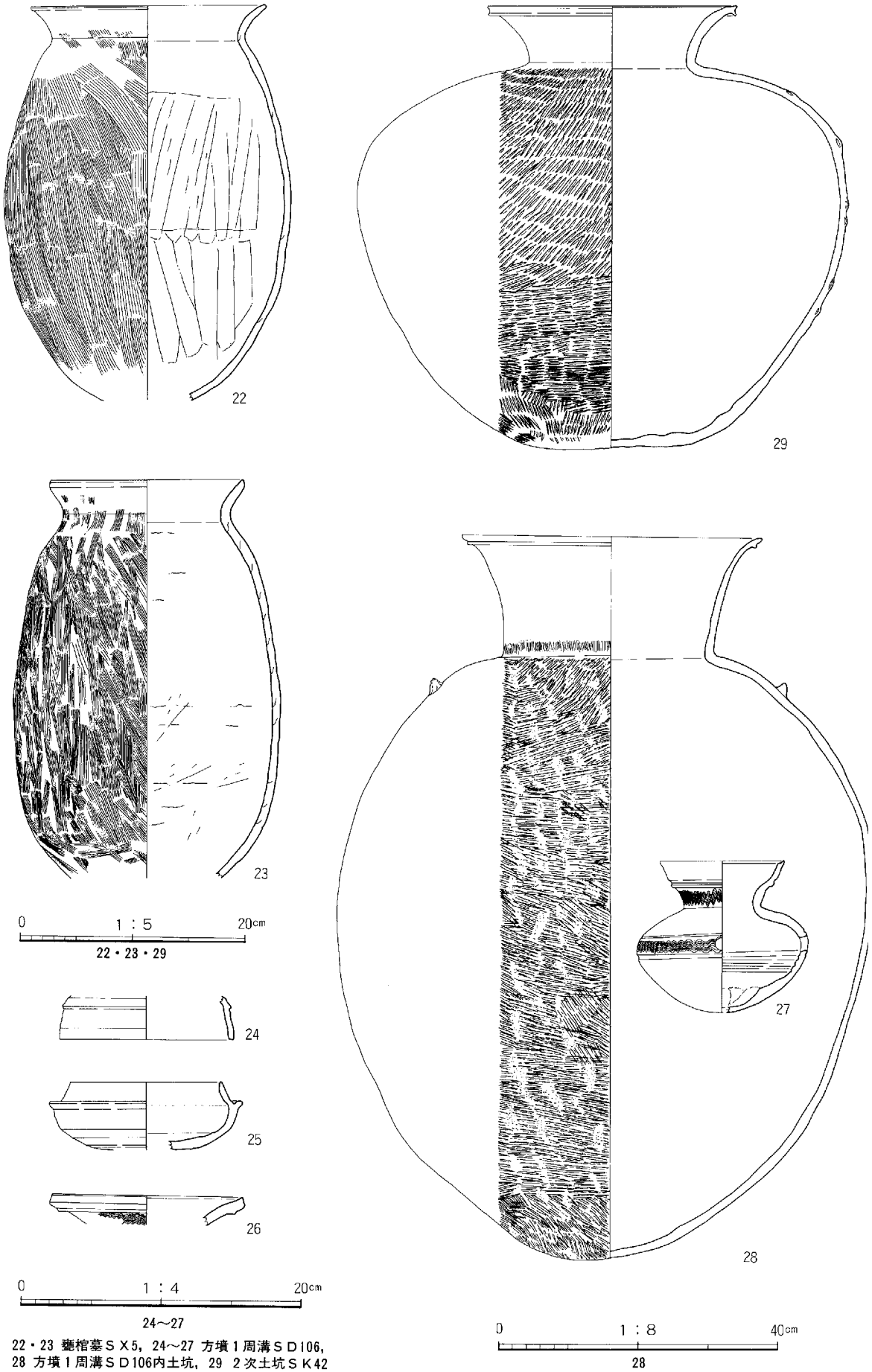


第24図　２次溝ＳＤ３出土遺物実測図



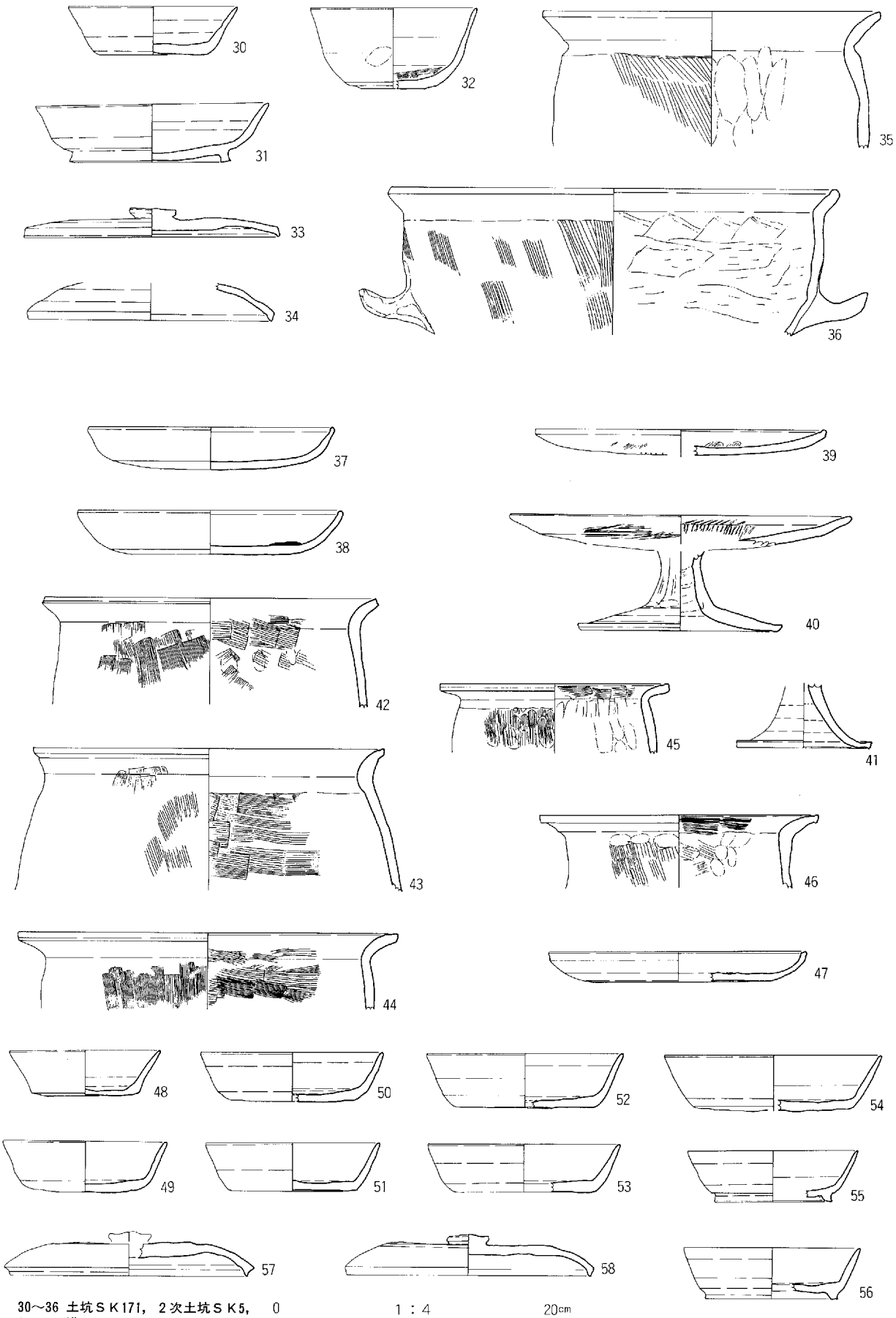
1～14 2次井戸ＳＥ86，15 方墳2周溝ＳＤ104，16 方墳2周溝ＳＤ140，17 溝ＳＤ162，18～20 溝ＳＤ161，21 土壙墓ＳＫ142

第25図　出土遺物実測図 1



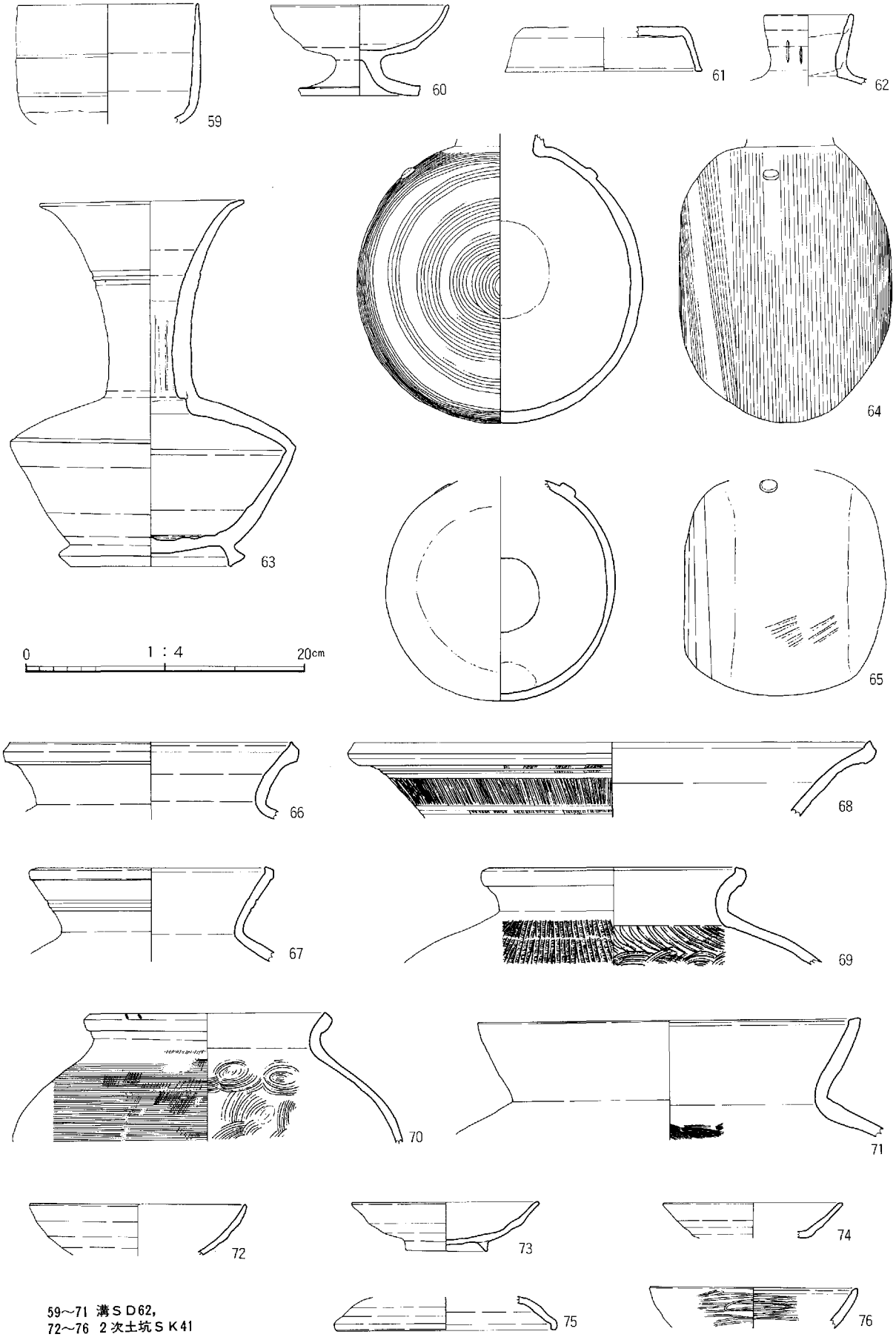
22・23 甕棺墓ＳＸ5，24～27 方墳１周溝ＳＤ106，
28 方墳１周溝ＳＤ106内土坑，29 ２次土坑ＳＫ42

第26図　出土遺物実測図 2

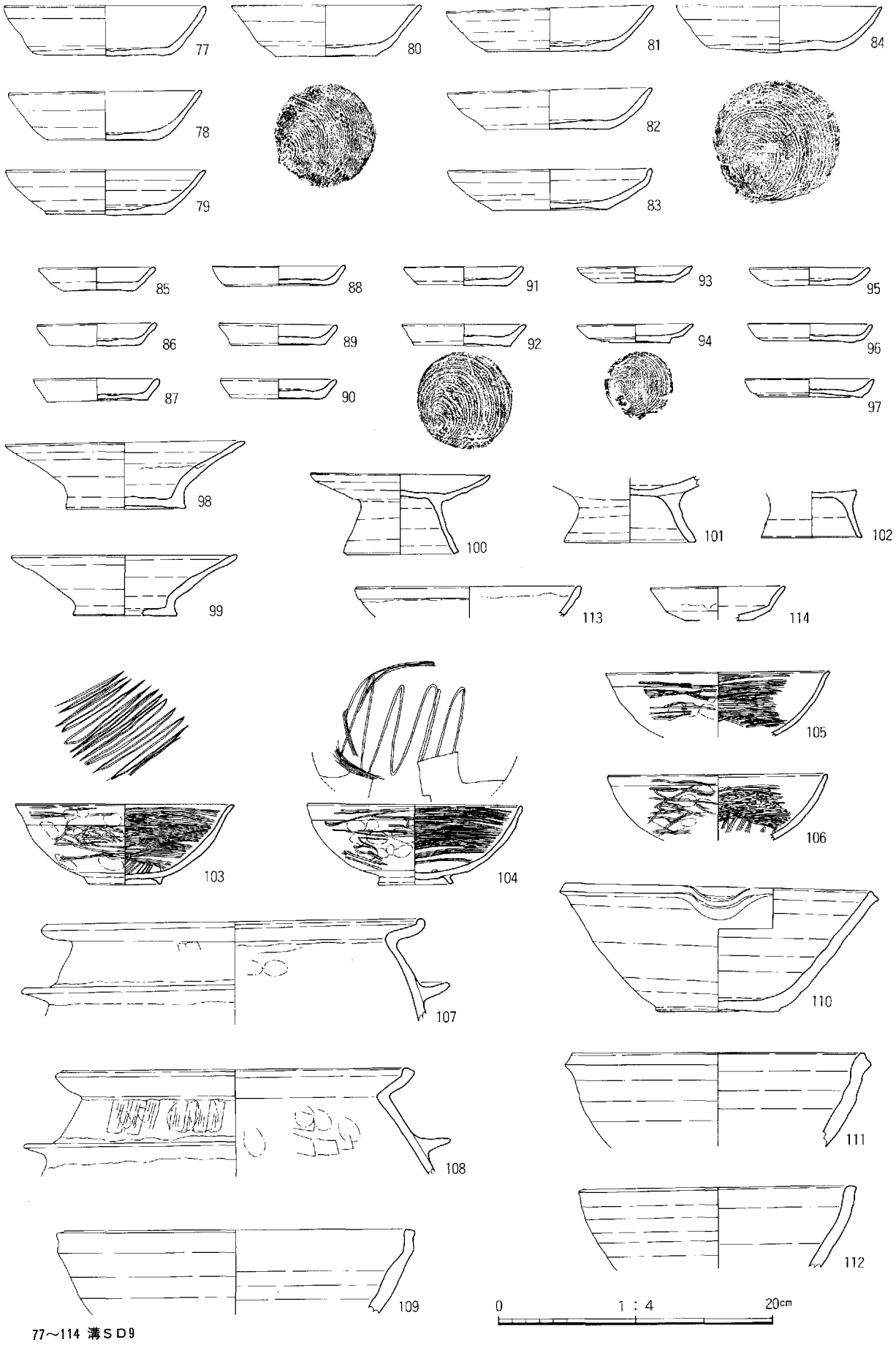


30～36 土坑ＳＫ171，２次土坑ＳＫ5，
37～58 溝ＳＤ62

第27図　出土遺物実測図 3

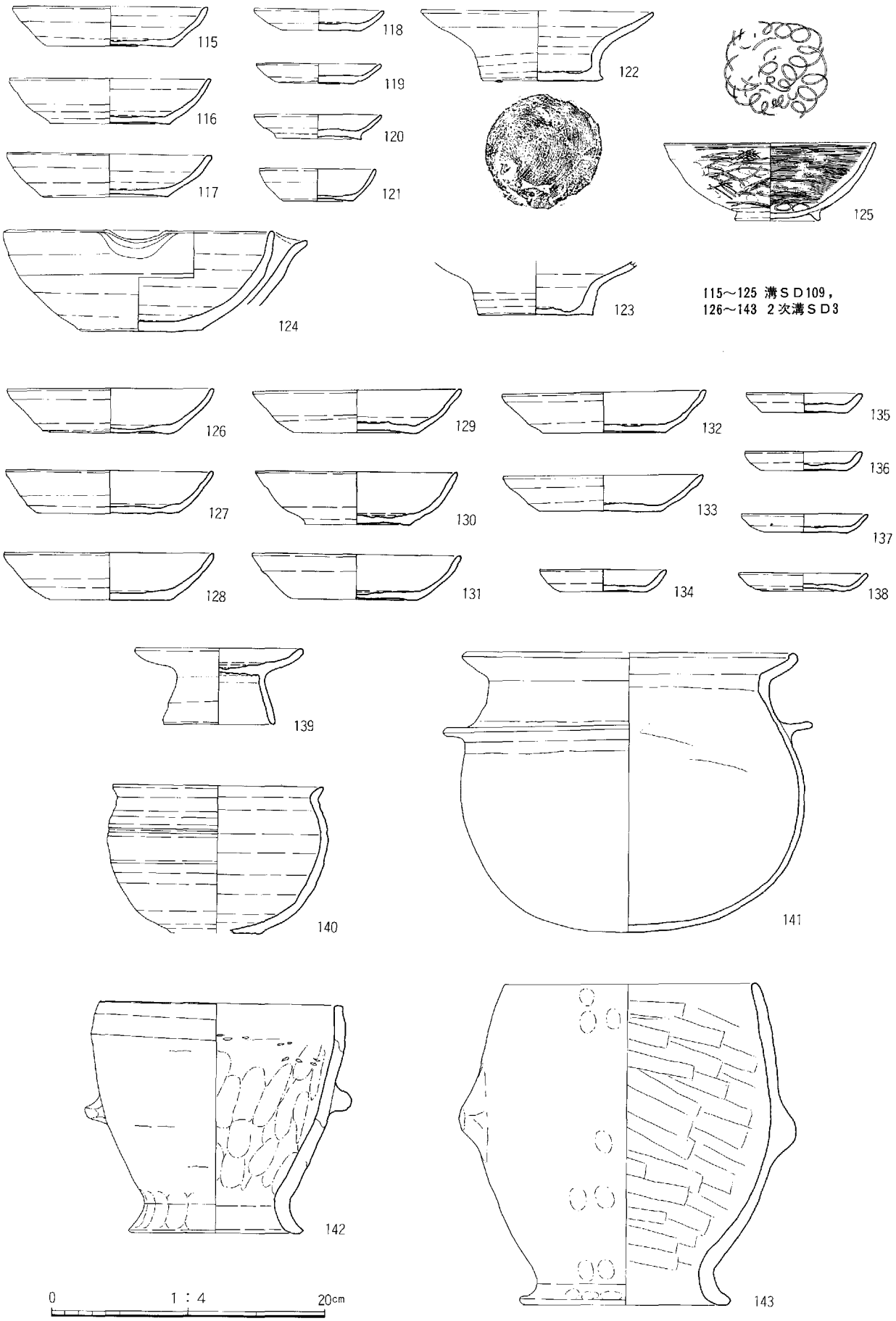


第28図　出土遺物実測図 4

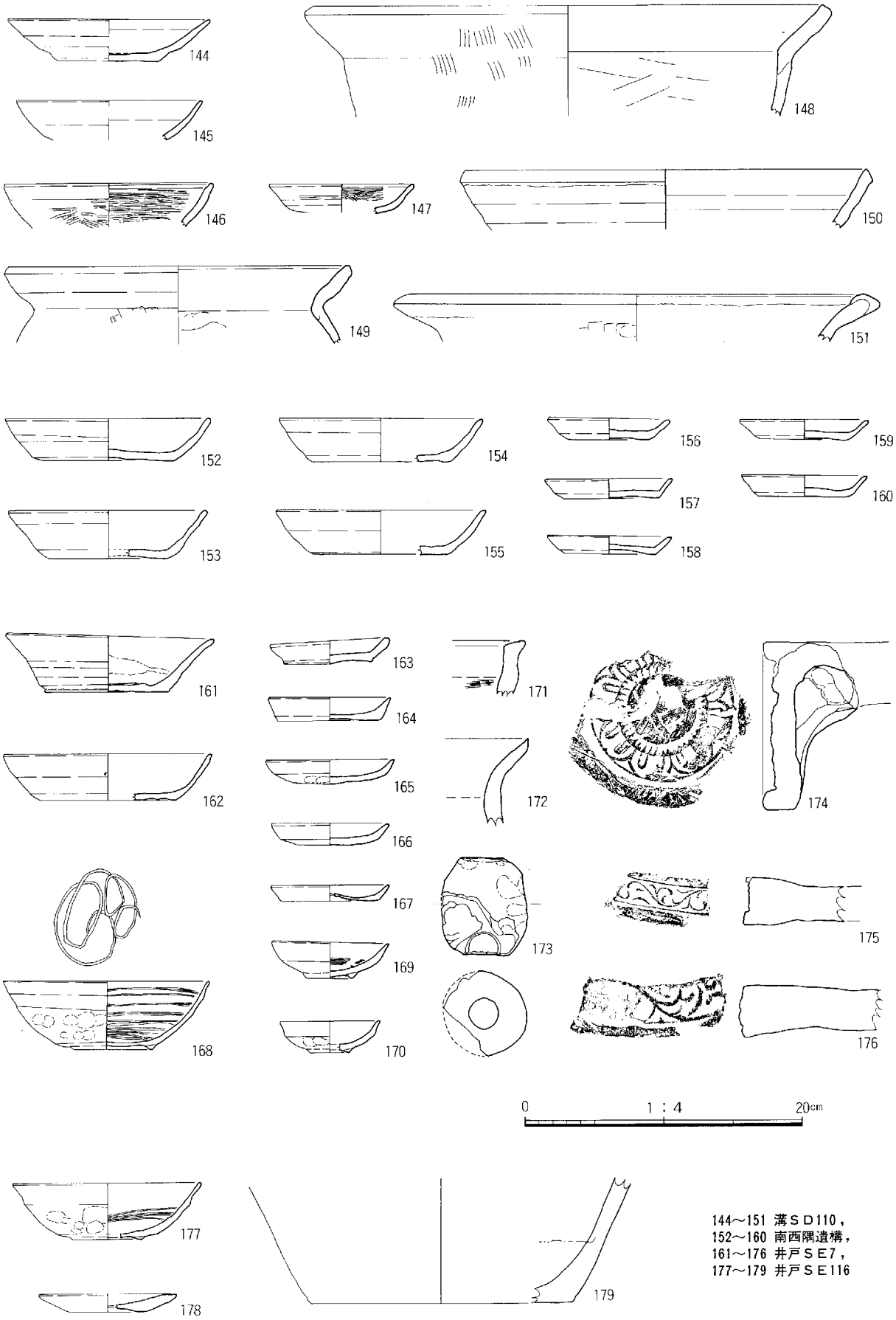


77～114 溝ＳＤ9

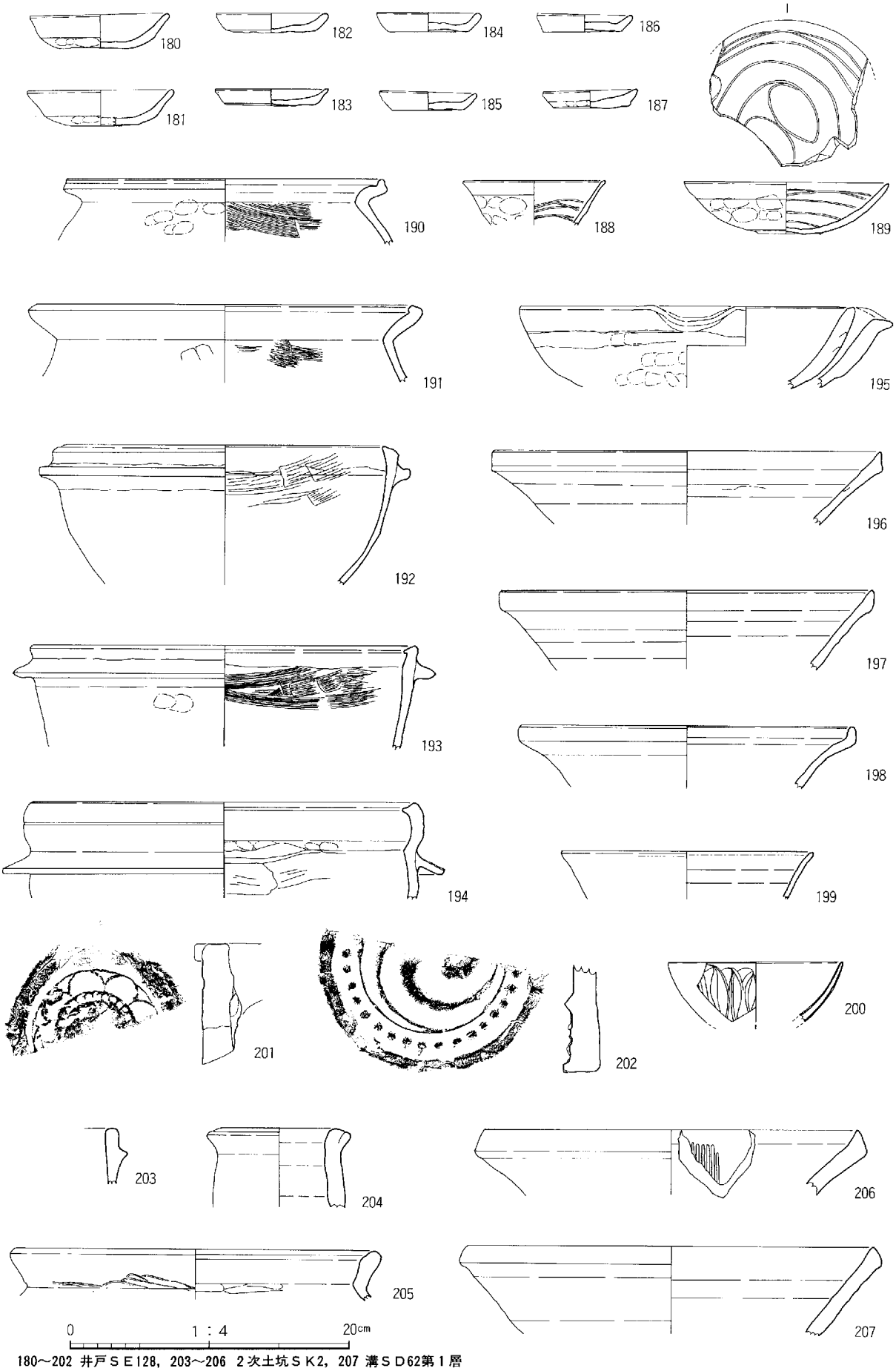
第29図　出土遺物実測図 5



第30図　出土遺物実測図 6

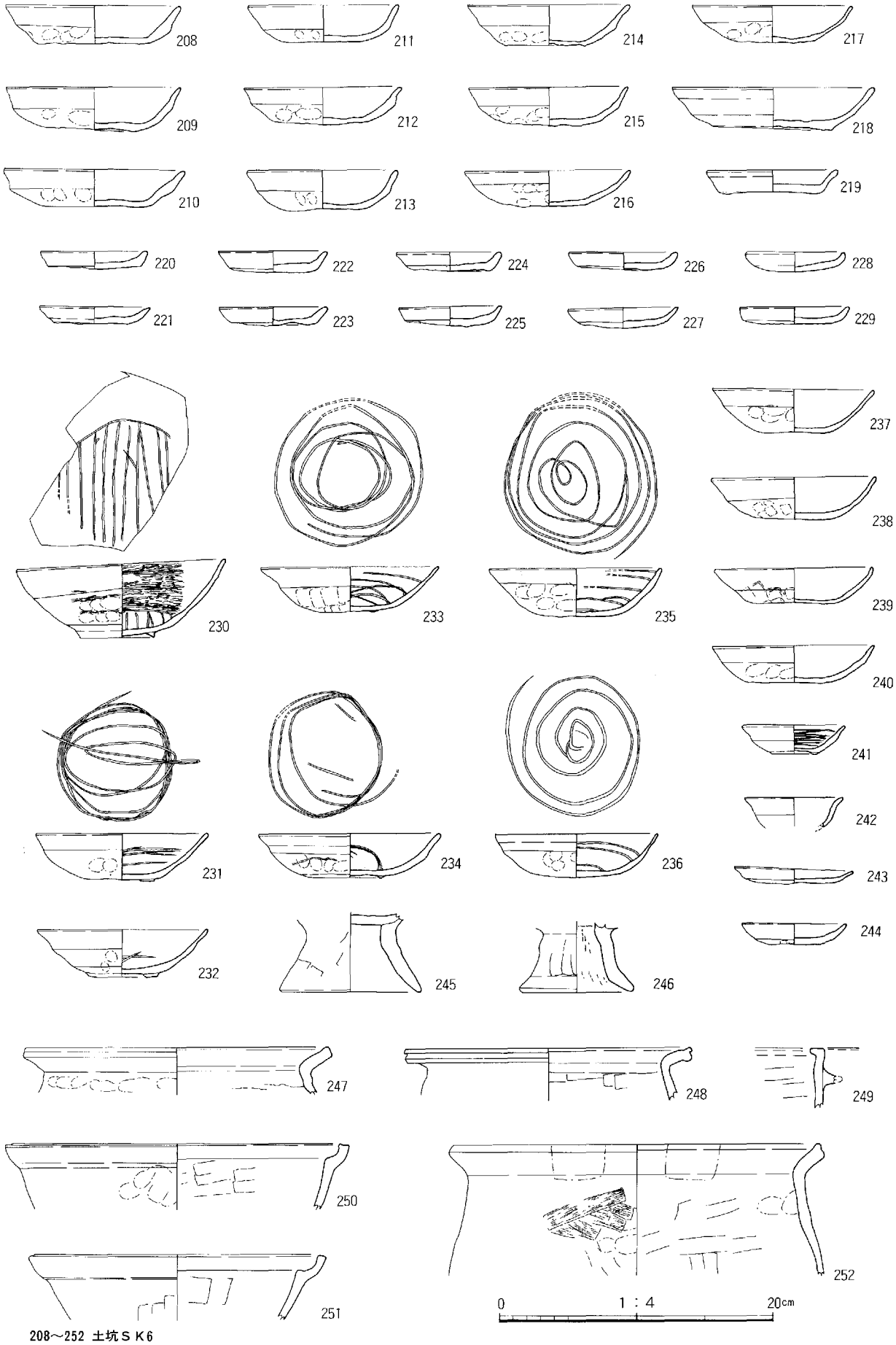


第31図　出土遺物実測図 7



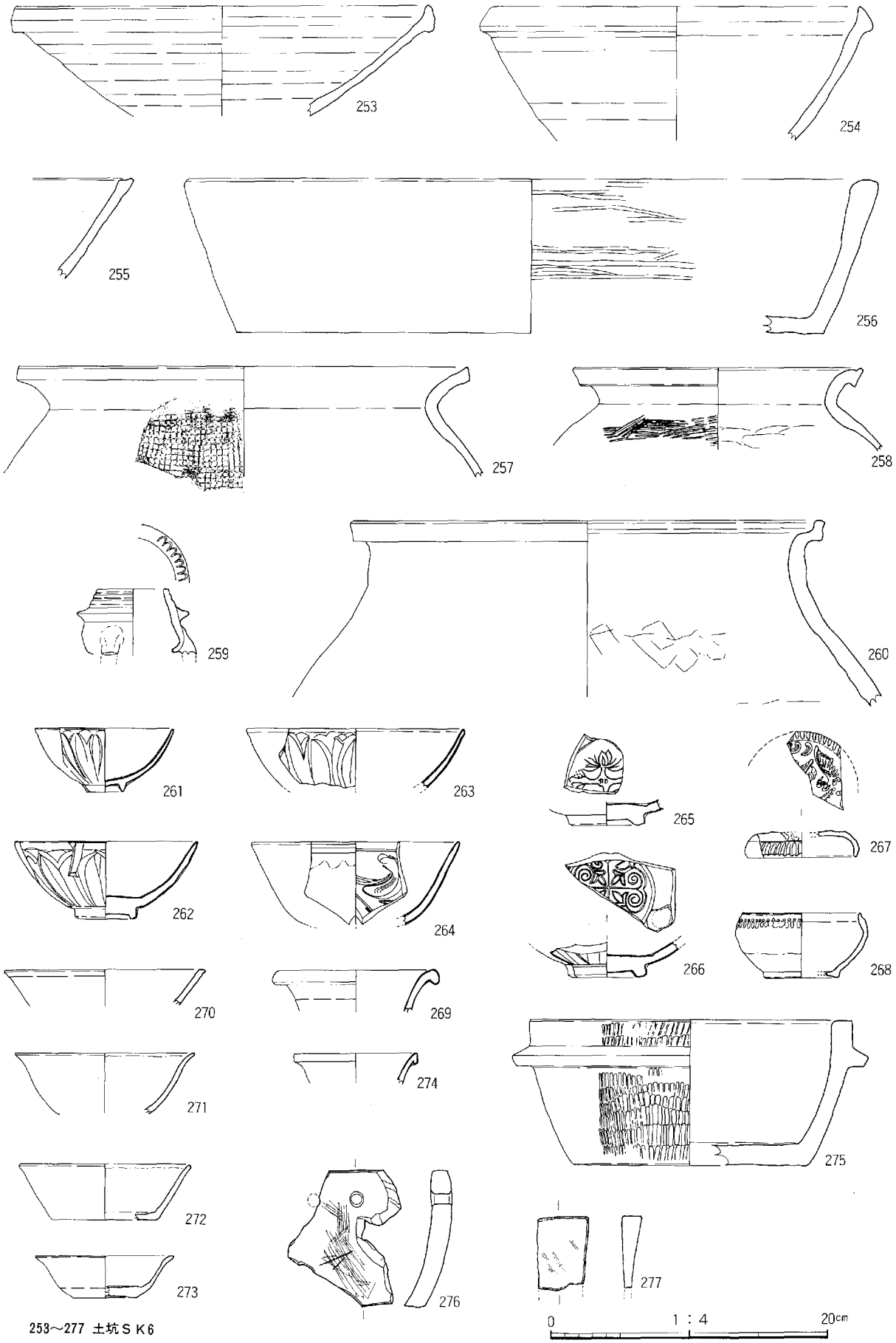
180～202 井戸ＳＥ128，203～206 ２次土坑ＳＫ2，207 溝ＳＤ62第１層

第32図　出土遺物実測図 8



208～252 土坑ＳＫ6

第33図　出土遺物実測図 9



253～277 土坑ＳＫ6

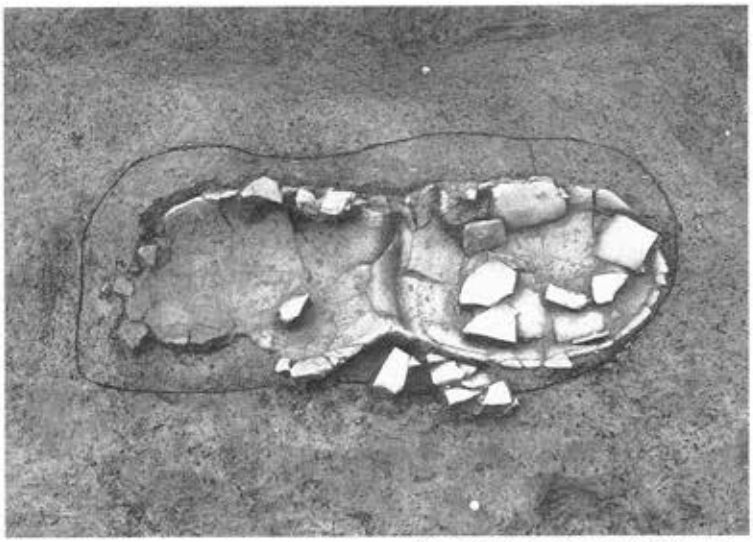
第34図　出土遺物実測図 10

1　遺跡遠景（北西上空から）

2　調査前の状況（南東から）

図版二

1　第三遺構面全景（東から）



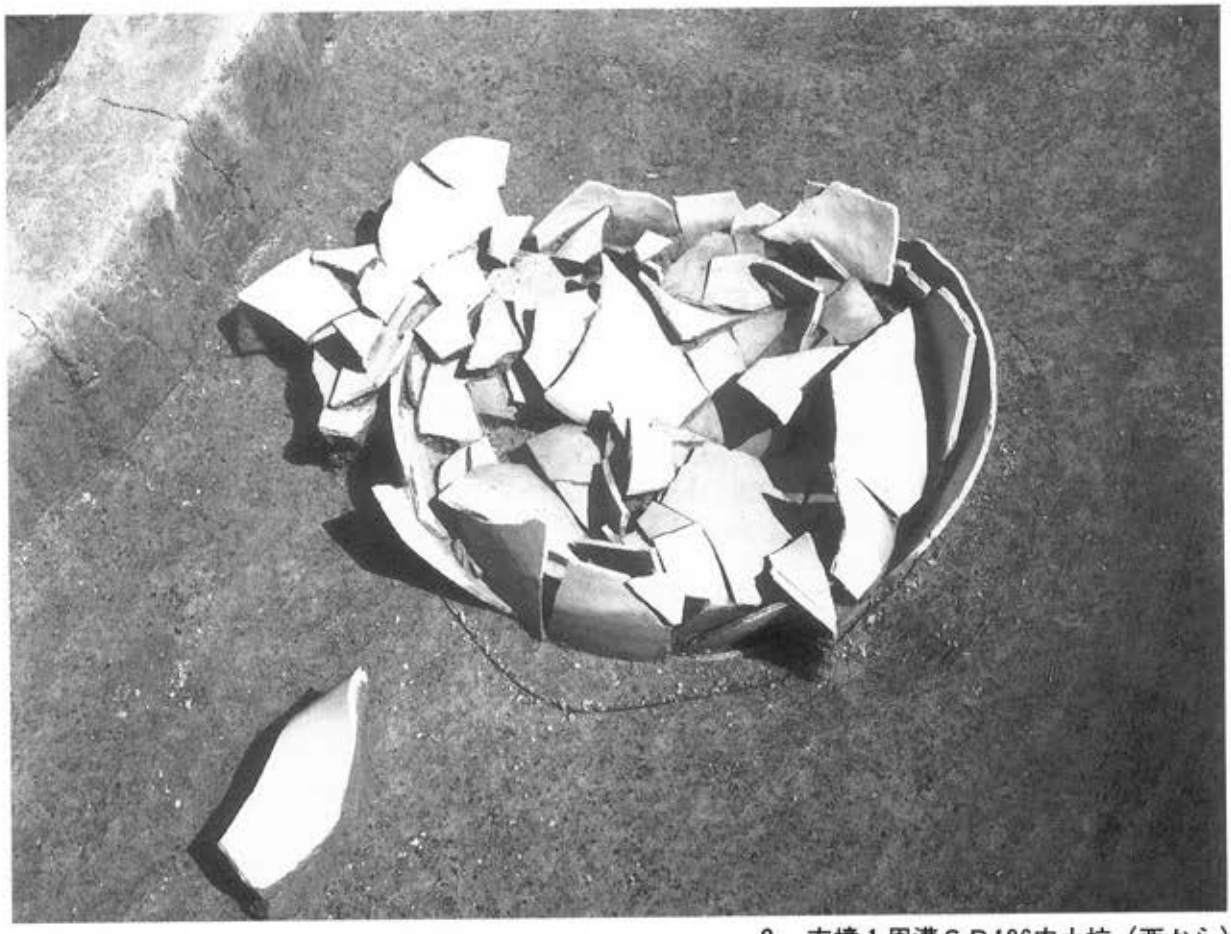
2　甕棺墓ＳＸ５（北から）

3　甕棺墓ＳＸ５（西から）

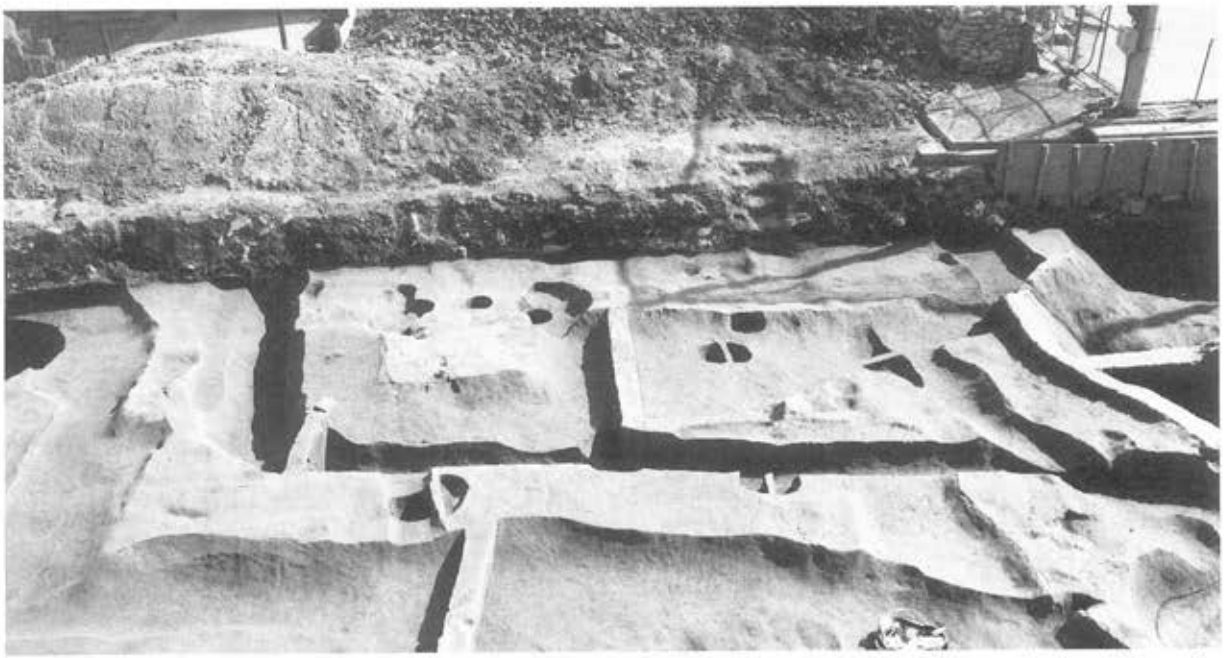
4　土坑ＳＫ100（南東から）

5　土坑ＳＫ100土層（南西から）

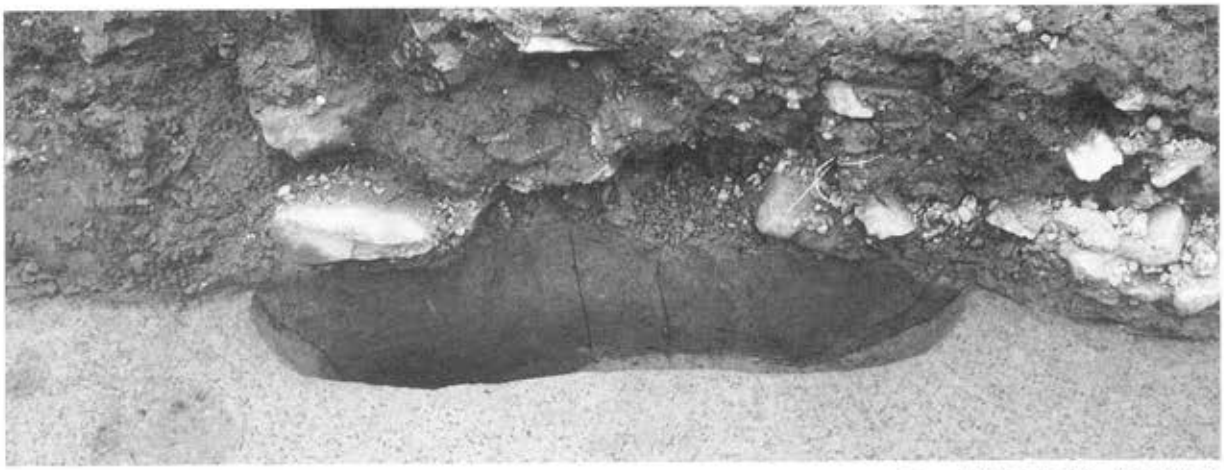
1　方墳１（南東から）



2　方墳１周溝ＳＤ106内土坑（西から）



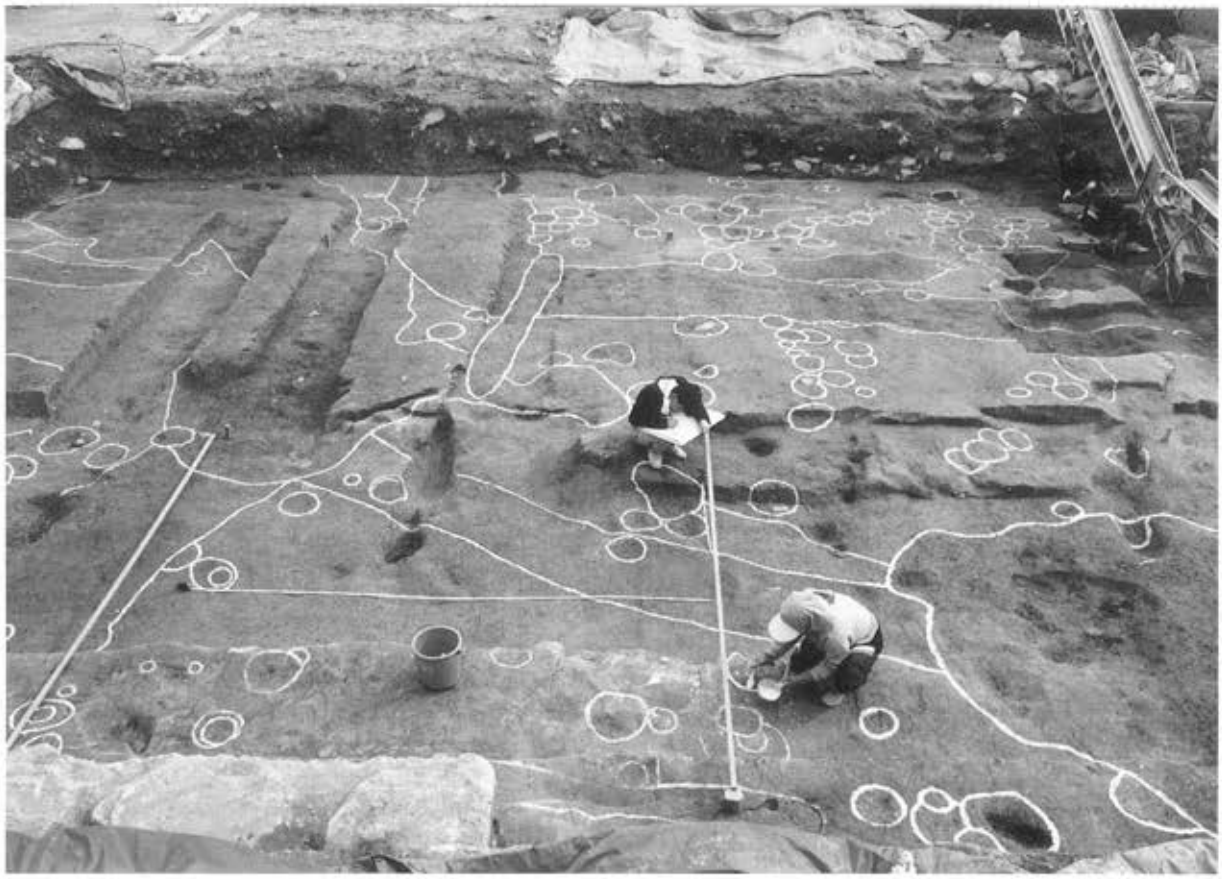
1　方墳２（北から）



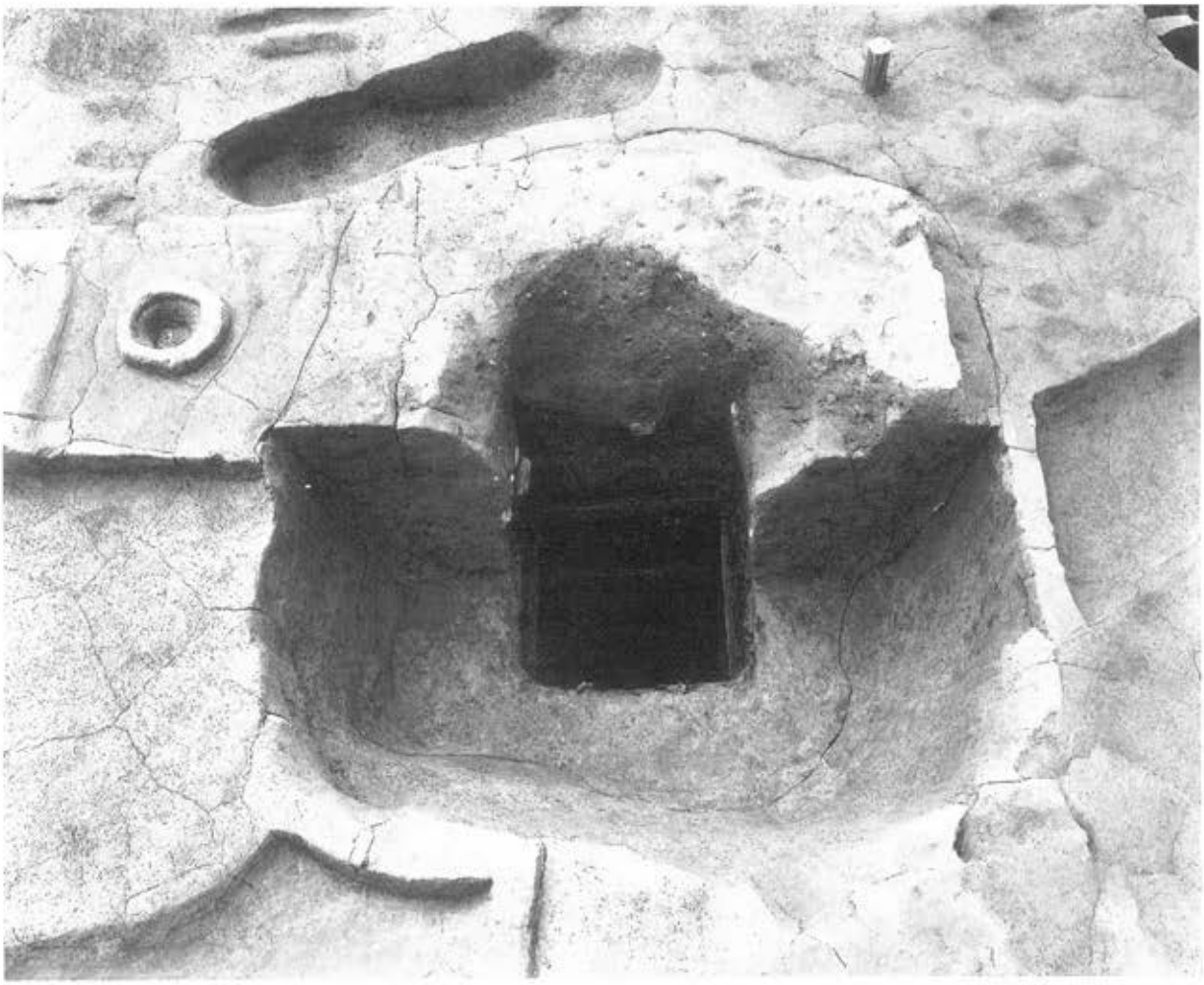
2　土坑ＳＫ115（北から）

3　土壙墓ＳＫ142（北東から）

1　溝ＳＤ62西端遺物出土状況（南から）



2　第二遺構面東側半分の遺構検出状況（北から）



1　井戸ＳＥ７（北から）

2　井戸ＳＥ７井側内細部（北から）
3　井戸ＳＥ７井側内細部（南から）

4　井戸ＳＥ７曲物製釣瓶出土状況（北から）

図版七

1　井戸ＳＥ116石組み（南西から）

2　井戸ＳＥ116竹出土状況（南東から）

3　井戸ＳＥ128（西から）

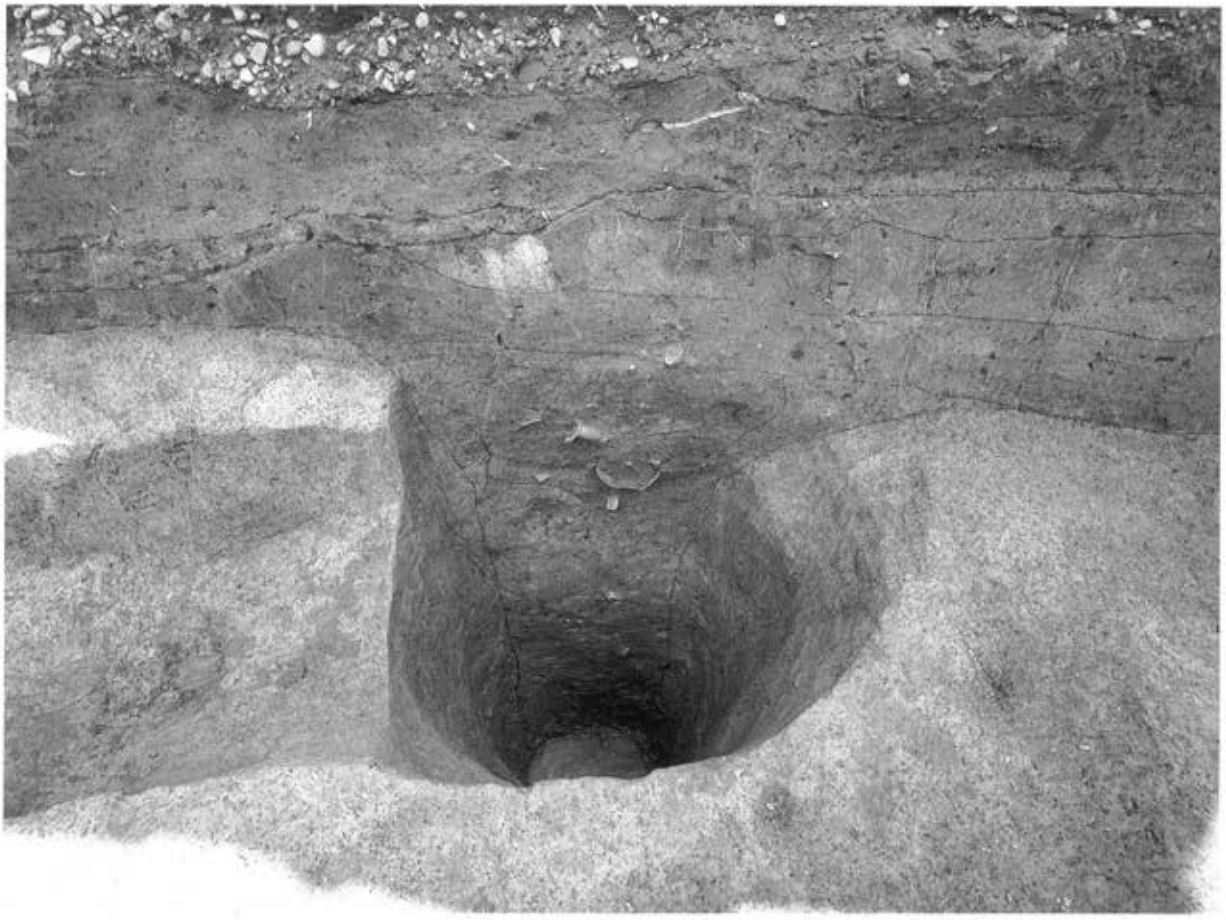
1　土坑ＳＫ６（西から）

2　土坑ＳＫ６土層（北から）

3　土坑ＳＫ６遺物出土状況（東から）

4　土坑ＳＫ６石鍋出土状況（東から）

1　2次第三遺構面全景（北から）

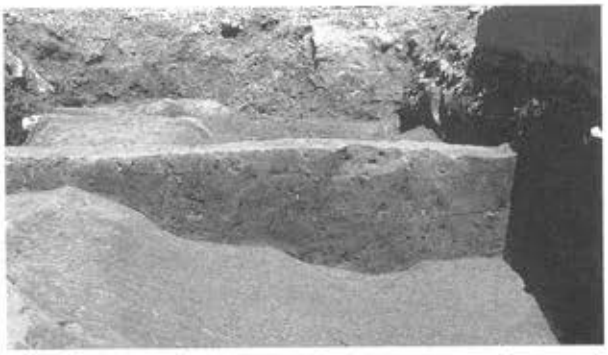


2　2次井戸ＳＥ36（西から）

1　２次第二遺構面全景（北から）

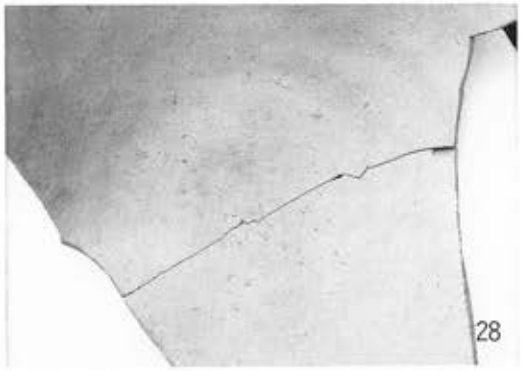
2　２次溝ＳＤ３遺物出土状況（西から）

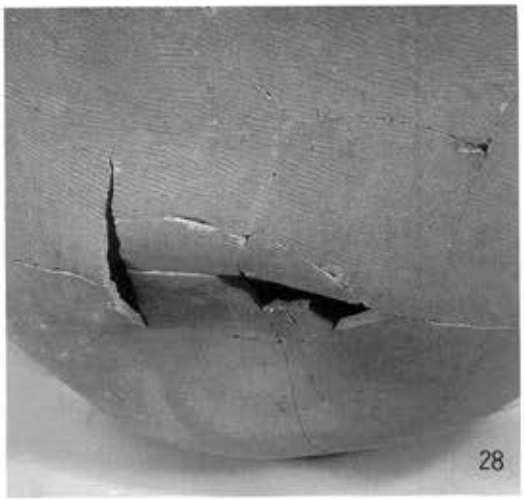
3　２次溝ＳＤ３土層（南から）



4　２次溝ＳＤ７土層（南から）

図版十一　出土遺物





8・12 2次井戸ＳＥ36，15 方墳２周溝ＳＤ104，
28 方墳１周溝ＳＤ106内土坑，29 2次土坑ＳＫ42

第25・26図

図版十二　出土遺物

21 土壙墓ＳＫ142，22・23 甕棺墓ＳＸ5，27 方墳１周溝ＳＤ106，
31 土坑ＳＫ171，58・63 溝ＳＤ62

第25～28図

図版十三　出土遺物

60

65

65

80

98

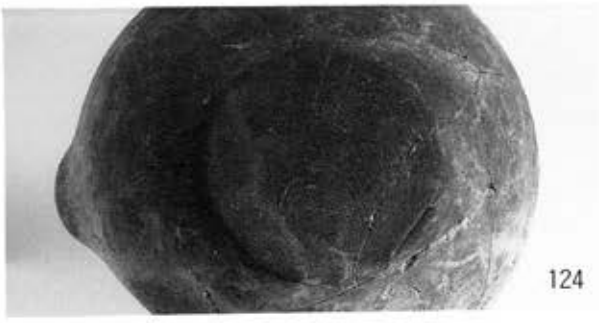
84

104

100

124

110


124

60・65 溝ＳＤ62，80・84・98・100・104・110 溝ＳＤ9，
124 溝ＳＤ109

第28～30図

図版十四　出土遺物

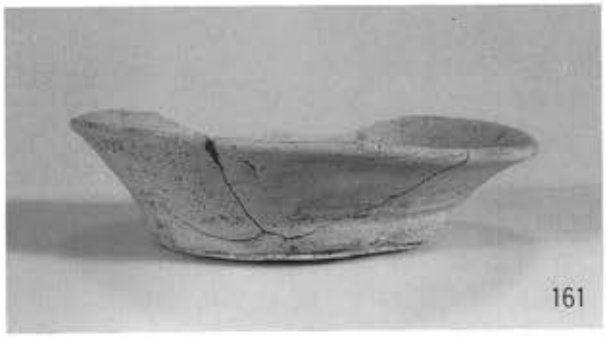
125

142

141

143

141
278


161

168

301

125 溝ＳＤ109，141～143・278 2次溝ＳＤ3，
161・168・301 井戸ＳＥ7

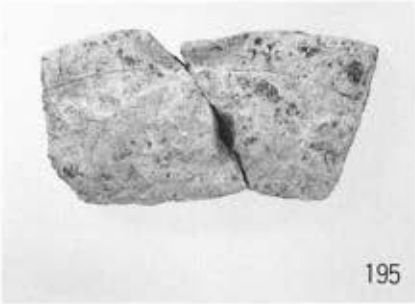
第24・30・31図

図版十五　出土遺物

174

193

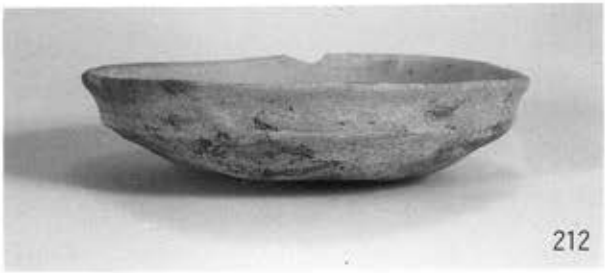
201


195

202

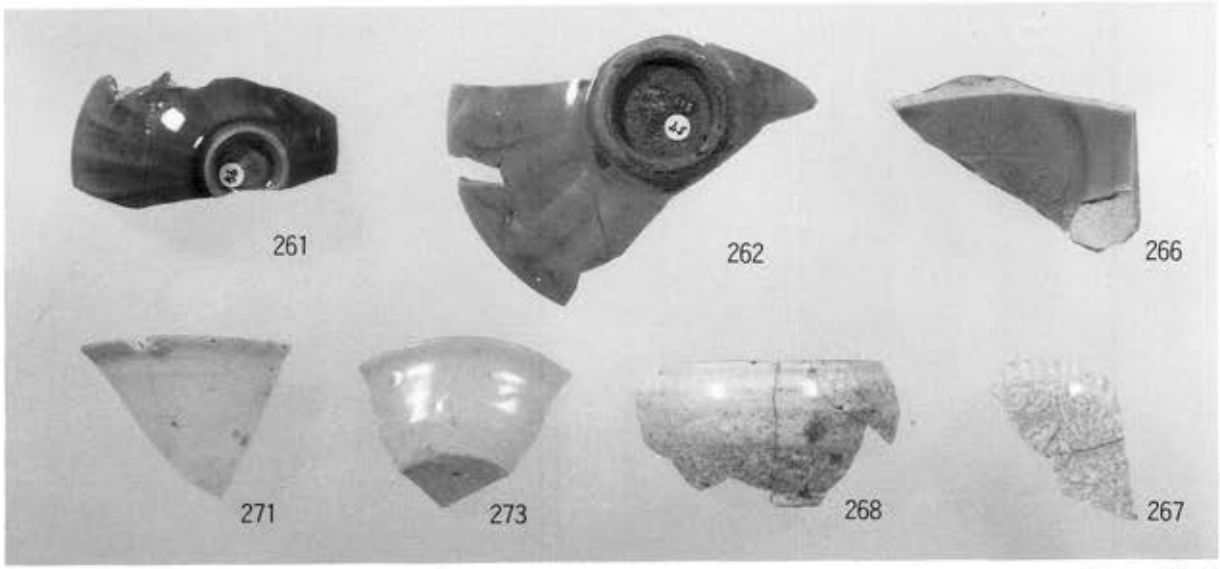
259

217


212

239

275



174 井戸ＳＥ7，193・195・201・202 井戸ＳＥ128，
その他 土坑ＳＫ6

第31～34図

秋　月　遺　跡

向陽高校危険校舎改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1994年3月

編集
発行　財団法人　和歌山県文化財センター

印刷　凸　版　印　刷　株　式　会　社